

研究ノート

覚書 柳宗悦と会津 - 中村昌道と柳の往復書簡を中心に -

長島雄一*

趣旨

柳宗悦は民藝運動の創始者であり、その運動を牽引し、発展させ、それに理論的な根拠を与えた人物として名高い。従来、柳と福島県、特に会津地方との関わりについては、会津本郷焼をはじめ絵蠟燭、檜枝岐の蓑・木工、野口英世の母シカの「キテクダサレ」の手紙などが様々な雑誌等で紹介されてきた。

柳は最晩年、会津若松市にある時宗の寺院：東明寺（弘長寺）の住職、中村昌道と出会う。2人は柳が死去する前年の1960（昭和35）年まで何度か会い、短信ながら、わかっているだけで計31通の書簡を交すなどして交流を深めた。本論では、これまで全く触れられてこなかった中村昌道と柳の關係にスポットを当て、それを日本民藝館所蔵の書簡を中心に紹介する。そして柳の時宗興隆の願い、中村の柳に対する献身的な支援や交流を通して、柳独自の「仏教美学」の形成に与えた影響について考える。また前段では、柳および民藝運動に関わった人々の会津における足跡をまとめ、今後の研究に資するものとした。

1 柳宗悦の略歴

柳の生涯についての記述は既に枚挙に暇がないが、ここでは本論へのアプローチとして略述しておく。

1889（明治22）年、東京で柳宗悦は生まれた。学習院高等科在学中に武者小路実篤らと雑誌『白樺』に創刊から加わり、キリスト教神学などの研究も行った。東京帝国大学哲学科を卒業した頃から、バーナード・リーチの影響を受けて宗教詩・画家であったウィリアム・ブレイクに傾倒する。



柳宗悦1954年
（日本民藝館提供）

芸術と宗教に立脚する柳独自の思想の礎ともなったブレイクとの邂逅を契機として、柳の関心は次に

東洋の大乗仏教や宗教的真理を基盤とする「美」に向けられていく。

1916（大正5）年以降、柳は浅川伯教との出会いをきっかけに朝鮮半島を旅し、陶磁器や仏像などの文物に魅了される。李朝時代の無名の職人によって作られた民衆の日用雑器に美を見出し、朝鮮の人々に対し敬愛の心を寄せて朝鮮民族美術館を開設する。

次いで柳は日本において木喰上人という江戸期の遊行僧が作った木彫仏（木喰仏）に刮目する。柳は日本においても民衆の伝統的生活のなかに深く息づく、すぐれた工芸品の数々を発見していく。1925（大正14）年、柳は濱田庄司・河井寛次郎・富本憲吉らと「民藝」という言葉を造り、翌年「日本民藝美術館設立趣旨」を発表。そして『工藝の道』（1928）において「用と美が結ばれるものが工芸」、「器に見られる美は無心の美」など民藝の「柱」を説いた。

1931（昭和6）年、雑誌『工藝』を創刊。柳の思想に共鳴する人々も増加し、各地で民藝品の展覧会や調査収集も盛んとなり、民藝運動の活動母体となる日本民藝協会は1934（昭和9）年に発足するに至る。そしてついに1936（昭和11）年、東京駒場に日本民藝館が開館する。初代館長となった柳は、ここを拠点に文筆活動、調査収集、展覧会などを活発に展開した。

日本民藝館開設以後の柳の主な活動の一つに民藝美の本質を仏教思想で解明した独自の「仏教美学」の提言などがあげられる。無名の職人が作った器がなぜ美しいのか。美はどこから生まれてくるのか、柳はその理由を「信と美」の結びつきによるものとした。全ての凡夫を救う仏の力、すなわち浄土門が説く阿弥陀仏の本願力（＝「他力」）のためとしたのである。そして晩年、篤い信心を身につけた浄土門（特に真宗）の妙好人研究を通して「他力」の世界を追求し、あくまで物の美を通して宗教の真理を説いた。本論でテーマとする中村昌道との交流（1954?～61）は、柳の最晩年に相当する。

柳は1961（昭和36）年に72歳で死去。1957（昭和32）年に文化功労者として顕彰され、1960（昭和35）年には朝日文化賞を受賞している。

*元福島県立博物館

2 柳と会津との関わりについて

(1) 東北の足取り

柳と会津との関係を見る前に、まずは広く、東北での彼の足取りから簡単にみてみたい。

予め記すが、本論にとって、また会津にとって重要な1954(昭和29)年5月18日～25日の会津行きの記録は、「年譜」(『柳宗悦全集』第22巻下 以下、『全集』と略す)にも「書簡集」(『全集』第21巻上中下)にも掲載されていない。この5月18～25日の会津行きについては後述することとし、それ以外の会津の足跡や会津関連の事項について、まずは『全集』の「年譜」と「書簡集」から拾う。本来ならば柳の膨大な文献を渉猟し、存在が明らかにされている「日記手帳」(中見:2006・2013)や関係者の記録などを参照すれば、当然、会津行きの記録が加わることは間違いないが、ここでは基本的に「年譜」「書簡集」のみを用いる。

柳の全体像はテキスト的にはこれらが収載されている『全集』によるしか基本的に方法はない。なお以下の文章における書簡番号とは『全集』で用いられた整理番号である。

1910(明治43)年 7月下旬

(群馬県)赤城へ行き尾瀬沼を訪れる。「年譜」

*会津に至ったかどうか、正確には不明

1927(昭和2)年12月28日

吉田正太郎宛 はがき 書簡番号:446
御大礼記念国産振興博覧会への東北における準備調査の帰路。「会津を経て帰洛します、(略)雪国を冬旅するのは初めて」

1933(昭和8)12月19日 河井寛次郎宛 封書
書簡番号:98

現代日本民衆展覧会等の準備のため水谷良一・森数樹ら仲間たちとの会津行。

「来る23日より会津本郷行、帰ってより多分一同で九州か四国行・・・」

柳らは宗像窯を訪れ、翌1934年発行の『工藝』39号(日本民衆特集号)で会津本郷宗像窯の鯨鉢と切立を紹介している。

12月23日 河井寛次郎 封書 書簡番号:100
「今日之から会津行・・・」

12月26日 太田直行宛 封書 書簡番号:965
「昨夜おそく雪の会津より帰宅。」

12月26日 濱田庄司宛 封書 書簡番号:967
「会津はもう寒かった 併し雪の中を三人で活動し中、獲物が多かった。」

1934(昭和9)年1月12～20日 東北の旅(「年譜」)
8月上旬 陸中を調査

8月末～ 森数樹と東北調査 福島等を巡る

9月初旬 芹澤銈介と宮城などを調査

1935(昭和10)年10月29日 山形・岩手の旅

1937(昭和12)年～ 積雪地方農村経済研究所の依頼で民藝品評会の審査、新しい民藝品の試作などを依頼。

1938(昭和13)年2月7日 積雪地方農村経済研究所「民藝の会」第1回例会出席

7月1日～ 東北の旅

9月28日～河井寛次郎・濱田庄司と東北の旅へ

10月上旬 及川全三と岩手県下を巡る

11月上旬 河井・濱田と会津地方を旅行

11月10日 寿岳文章宛 はがき

書簡番号:1351

「河井、濱田等と会津の方を旅してきました、・・・」

11月15日 河井寛次郎宛 封書

書簡番号:158

「旅の事色々と思い返してゐる、また出かけたいものだ。」

1939(昭和14)年2月1～末日 日本民藝館で東北各地の蓑類・大津絵と泥絵の特別展覧。

2月13日 庄内地方へ赴き手仕事の調査

5月9日～6月11日 ここまでの東北調査の集大成として館において1939年の「東北の民藝 特別展覧」で講演

7月4日～ 河井・濱田と尾瀬沼・檜枝岐訪問
8日帰宅。

11月12日 山形県新庄町へ赴き、13日「東北の産業」に関し講演。

1940(昭和15)年2月4～9日 青森へ旅行

2月中旬から河井・外村・式場隆三郎と東北の旅。会津若松・山形・秋田・青森・盛岡・仙台等を巡り、雪国協会等主催の東北地方民藝品展の審査を行い、講演会・座談会に出席する。

6月23～29日 日本橋三越で日本民藝協会・雪国協会主催「東北民藝品展覧会」開催

11月12日 第1回東北地方手工藝振興連絡会議に出席

1941(昭和16)年2月5～12日 陸中地方を旅行

2月22日 館で東北地方手工藝振興連絡会議が開催され出席

3月11日 館で東北地方手工藝振興会の座談会に出席

3月16日 河井寛次郎宛 封書 書簡番号:190
「4月3日より東北六県地窯歴訪。濱田同行。」

4月10～16日 芹澤銈介・式場らと岩手県一ノ関町で岩手の手工藝展の審査と講演を行う。

4月末 山形県新庄の手工藝講習会に赴き講演
 6月14日 東京日日新聞社の「東北の民藝を語る」座談会に出席
 6月20～28日 日本橋三越で雪国協会と共催の「第2回東北民藝品展」開催
 1942（昭和17）年1月5～9日
 秋田県角館で樺細工を視察。
 1月15日発行の『工藝』第108号を「東北の民藝特集」とし、「民藝と東北」他を執筆。
 11月10日 工藝選書第二冊『雪國の蓑』を日本民藝協会から刊行。
 14日 河井・村岡・外村と東北の旅に発つ。弘前・盛岡・角館の各民藝協会支部発表会に出席、講演し、22日帰宅。
 1945（昭和20）年7月初旬 東北の旅に出るが、10日高萩駅で艦載機の機銃掃射を浴びる。仙台炎上の為下車不能。青森の相馬貞三宅などに宿泊・滞在。
 1946（昭和21）年11月24日から東北の旅。花巻・土沢で宿泊。盛岡で紫染を見て座談会に出席。12月1日一ノ関で民藝館接収の報を受け急ぎ帰宅。
 1947（昭和22）年10月 北海道の旅の帰路、青森・弘前に立ち寄る。
 1948（昭和23）年6月14日から東北の旅。盛岡・岩泉から土沢の及川家へ。仙台を経て帰宅。
 1951（昭和26）年3月～4月中旬 館で還暦記念蒐集「三春人形・相良人形・鴻巣雛特別展」を開催。
 1953（昭和28）年10月 リーチと東北・北陸の旅。4日一ノ関、6日盛岡、8～12日青森、その後新潟を巡り各地で講演会・座談会を行う。この時、瀧田項一が会津・三春などを案内する。
 1954（昭和29）年3月1日～ 館で「東北の民藝」特別展覧開催。
 5月15日 宇都宮市で開催の日本民藝協会第8回全国協議会に出席。16日益子・大谷・日光などを巡り、17日輪王寺を訪れる。宇都宮教育会館で講演。25日帰宅。
 *18～24日の会津の足取りについては後述する。
 1955（昭和30）年5月3日一ノ関へ赴く。4日平泉中尊寺で日本民藝協会第9回全国協議会開催。講演。
 5日花巻・7日盛岡・8日仙台。それぞれ講演と懇親会。10日帰宅。
 1956（昭和31）年3～4月末
 館で「庄内被衣展」開催
 以上が「年譜」や「書簡」などから見える東北に関する動きである。東北という土地への認識として注目される発言は、1939（昭和14）年5～6月に開

催された「東北の民藝 特別展覧」における講演であろう。（「民藝と東北－東北民藝展に於ける講演の要旨－」『全集』第9巻）。柳はこの講演で、東北という地域について「由来東北は貧窮な地方」と伝えられてきたが、「幾多学ばなければならぬ優れた要素がある」「文化的価値からみれば東北は驚くべき富有な土地」、「優れた数々の手仕事」がある場所であり、「真に民藝の宝庫」であると述べている。南の沖縄と共に北の辺地である東北という土地を、柳は色濃い民藝の地として認識していたことは重要である。

（2）会津における動き

次に会津に絞り込んで足跡を追ってみよう。「年譜」「書簡」を見る限り、会津には少なくとも8回ほど訪問していることを確認できるが、ここでは「年譜」以外の例も含めて、その代表的なものやいくつかのエピソードを拾ってみることとする。

① 会津本郷焼

日本中を旅した柳は1948（昭和23）年刊行の『手仕事の日本』の福島県の中で、中・浜通り地方の民藝も挙げつつ、会津本郷焼、会津塗、会津絵蠟燭、煙管、塔寺釜、喜多方日中の手漉き紙、檜枝岐の藁製の品（雪踏・雪沓）、曲木の標、木彫り刳鉢・手桶、蓑など多数の会津の手仕事を記している。福島県の中で柳が最も注目したのは会津地方であった。

その中でも柳と会津を語る上で最も頻繁に登場し、よく知られているのは会津本郷焼であろう。1958（昭和33）年に開かれたブリュッセル万国博覧会において宗像窯6代目豊意作の「練鉢」がグランプリを受賞、次いで7代目亮一の日本陶芸展での優秀作品賞、日本民藝館賞など数々の賞を受賞した会津本郷焼（宗像窯）について、柳は『手仕事の日本』で次のように紹介している。

「本郷という町は焼物でその名を高めました。磁器も陶器も共に作ります。大体北国には磁土が少いのでありますが、ここの茶器、特に急須の如きは販路を広めました。しかし出来上がった品から見ますと、実は一番人々から粗末に扱われているいわゆる「粗物」と蔑まれているものが、最も特色のあるまた見事なものだと評さねばなりません。今はこの「粗物」を焼く窯がたった一つより残りませんが、白釉のものとは餡釉のものと二通で作ります。これに緑釉を流したり海鼠釉を垂らしたりして景色を添えます。緑の方は銅から取り、海鼠の方は鉄から取る青色の色をいいます。ここで出来る長方形の「練鉢」や「切立」と呼ぶ甕の如きは、他の窯に例がありません。本郷の仕事としては、どこまでもこの粗物類を大切に続けるべきでありましょう。この窯で

は一番健康な仕事であります。』

そして「現在の日本民窯」(『全集』第12巻)では「鯀鉢」と「切立」について、それぞれ次のように解説している。



鯀鉢 (福島県立博物館蔵)

「鯀鉢：今は僅かに宗像と呼ぶ一軒よりなくなったのは甚だ淋しい。

だがこの一軒から色々忘れ難いものを作る。この鯀鉢の如きよい一例である。形も他の窯に例を見ない。一把漬とか二把漬とかで大小になる。多くは鉛釉で時折白を流す。左右に支への為耳がつく。大型の分丈五寸七分、巾一尺、奥行七寸五分。水盤に用ゐて花を活けると引き立つ。

「切立：この種のもの土地では「きったて」と呼ぶ。切り立った形から来た名であらう。用途は主に水甕であるが、広く醤油や酢などの容器として用ゐる。玄関の傘立にでも役立てれば新しい用途が生れよう。凡て鉛釉に白が流してある。それが屢々海鼠色に変わる。昔は白地に緑を流したのも作った。形が甚だ立派で之も他の窯に見られる甕の様式とは違ふ。丈一尺四寸。本郷ではこの種の「粗物」で鉢だとか壺だとかまだ色々のものを作る。もっと一般にその価値が知られていゝ。』『全集』第11巻 (p641) においても、鯀鉢の高い評価が記されている。



切立 (筆者蔵)

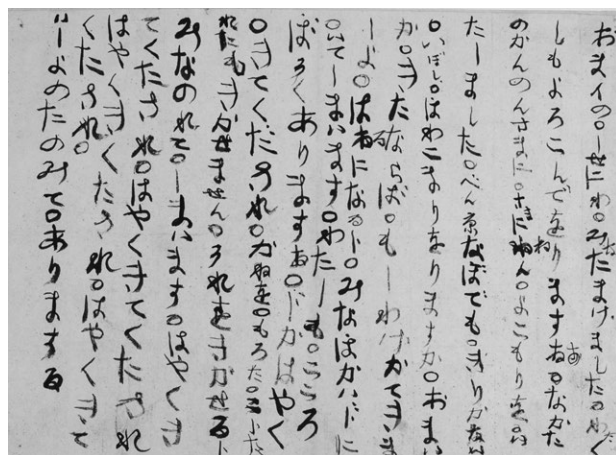
ブリュッセルでの快挙はマスコミで大きく報道され、会津本郷焼の粗物の良さを多くの人に知ってもらいたいと願ってきた会津の民藝運動の牽引者である瀧田項一や、民家の保存運動に尽力し、後に会津葵を経営する五十嵐大佑など民藝に関心を持っていた人々にとって大きなニュースとなった。

七代目宗像亮一によれば、この博覧会に鯀鉢の出品を勧めたのは柳と濱田庄司であり、出品は地元の役場を通じてなされたらしい(「会津本郷焼のこと」『民藝』527号)。作品の美や価値を見出し、高く評価した柳の眼、見立ての延長上に国際的な受賞が成ったことは言を俟たない。「直観」・柳と行動を共にした畏友、濱田は「柳を知って40余年、いつでも驚くのは、美しいものに対するこの柳の眼の力だっ

た。」と回顧している(濱田：1974)。なお1931(昭和6)年、河井寛次郎は益子の濱田の自宅で本郷焼を見て感激し、同年、宗像窯を訪ねている(河井：1981)。1933(昭和8)年、森數樹は会津若松を訪問、片口や鉢、鯀鉢を持ち帰り、同年、柳も水谷良一・森數樹と共に本郷を訪問している(柳：1942)。

② 野口シカの手蹟

柳は世界的な細菌学者である野口英世の母シカが、1912(明治45)年1月23日にアメリカにいる息子宛に書いた手紙を取り上げ、「野口シカ刀自の手蹟－野口英世博士へ与へた母の手紙－」(1955)を著している(『全集』第18巻)。この手紙は濱田庄司が会津旅行の土産として持参した野口記念館による複製版であった。柳は病氣横臥中でありながら「拝みたいほど」に感激しつつ読み、「キテクダサレ」が連続するこの手紙に美を見出し、理由を解説している。



野口シカの手紙 (野口記念館蔵)

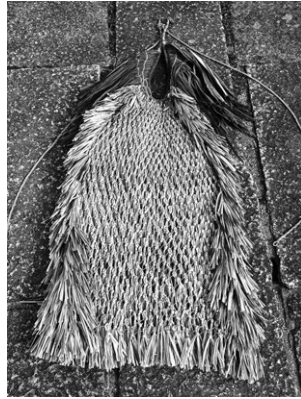
柳や濱田が感嘆したのはシカの「文字(=手蹟)の美しさ」であった。シカの文字には純粋な母の愛が満ち、うまく美しく書こうとする邪念(計らい)がない。後世、人々から読まれるであろうなどというたくらみもない。第三者が手紙を觀賞するなどとは少しも思わずひたすら書いている。例えば「百万遍」の如く、念仏を一心に称えることで誰もが往生できるとされるように、無心に字を書き、美を創作するなどという意図などない「無私」の域に達した時、神仏や自然の力がそこに働き、全ての人が優れた美を生み出すことが可能となるとした。柳はこの手紙に「そのまま」という心のあり方、無心の境地から生れる美を発見し、浄土門でいう「他力」を見出している。シカの手蹟は柳の美意識さらには柳独特の「仏教美学」を理解する上で重要である。

③ 檜枝岐の蓑

柳は「雪国の蓑」で東北・栃木に特色ある蓑があるが、北東北(青森・岩手・秋田・山形)に優れた



蓑 福島県(岩代檜枝岐)
1930年代(日本民藝館提供)



蓑(会津民俗館蔵)



檜枝岐にて 柳宗悦
1940年頃(日本民藝館提供)

ものが多いと記している。しかし奥会津檜枝岐の蓑については例外的に、写真入りで紹介している。また、『全集』第11巻の口絵写真には柳自らが蓑を着た姿も掲載されている。この写真は2022(令和3)年に開催された『東北のまなざし』展図録(P209)にも載せられており「檜枝岐を調査する柳 1940年頃」のキャプションが付けられている。

檜枝岐の蓑について柳は「宛ら熊が動くやうにさへ」と形容し、特色を次のように解説している(『全集』第11巻P506~507 初出:『工藝』74号)。

「福島県檜枝岐の作で、会津の南、尾瀬沼の北に當る山村で出来る蓑である。一見して特色ある作りである事が分る。肩や背の部分は茶褐色の葡萄皮である。腰の部分は岩芝である。長く垂らす科皮など、違ひ編み重ねてゆく。着てあるのを見ると、宛ら熊が動くやうにさへ見え受ける感じが強い。狩の多い山村の生活が生んだ形だと思へる。丈四尺あまり。子供用のも作る。

この蓑の最も大きな特色は蓑の編み方であって、極めてよい仕事であるから、一疋を添へた。麻糸で岩芝を編んで見事な網にする。強い弾力があり、延び縮みするから身体に柔かく當る。荷を背負ふにも腰かけるにも又は敷いて休むにも、何よりの品物である。

この網状にする裏地は、越中その他の蓑にも時折見られ、古くから好んで用ゐられた様式だと思へる。伸縮が自在で用途に適した手法なため好んで選ばれるのであろう。昔の加賀蓑には上を網で被せたのがある」。なお柳は同じ蓑を同巻P520~521でも解説

し、さらに「蓑について」同巻P637 初出:「挿絵解説」『工藝』第74号)でも取り上げて、ほぼ同様の解説を行っている。「よくよく見ると、その蓑作りにはとても心が籠めてあって、まるで自然の一部の如き調和を示しているのに見とれたことがある。

その美しさを見ると、こんなものは都会人には無用だとのみ云って見棄てるわけにゆかぬ。その荒々しさも、どこか健康の徴であって、そこなはれた都会人の衣服のへなへなとしたものとは性質が違ふ。どこからその健康さが来るのか、都会人は之をもっと反省してよいであらう。」

柳宗悦と柳田國男の考え方の相違はよく指摘されるが、柳田の「願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ」(『遠野物語』序文)という鋭利な言葉には、奥深き地で自然に溶け込んで生きる人々への限りない敬愛が存分に含まれていると思う。その点においては柳も全く同じ思いであらう。

この檜枝岐独特の蓑は現在、檜枝岐村歴史民俗資料館・奥会津博物館・同館附属前沢資料館・会津民俗館等の展示で見ることができる。また「ヒロロ(深山寒菅)の今」『会津学』第4号で菅家博昭が紹介している(会津学研究会:2008)。

④ 柳が欲したと伝わる檜枝岐の石仏

『檜枝岐村史』(檜枝岐村:1970)の「墓碑」の項には、村内に数多く点在する墓石や石造物について「今はなき日本民芸協会長の柳宗悦などもその作の珍しく、高貴な石仏に驚いたほどである。」とある。

柳のエピソードが残っている。斎藤弥二郎が著した『檜枝岐物語』(斎藤:2003)には次のような話が収録されており、以下に引用する。



柳が欲したとされる石仏
(正面)



同側面(延宝四年の銘)

「かつて、日本民芸協会の大御所、柳宗悦氏が来村され、所望された地蔵尊もある。柳宗悦氏がとても所望されたが、村長の橋朝良さんは譲られなかったという。いきさつを橋朝良さんはこんなふうにご話してくださいました。

「おれが村長の時（筆者註：橋朝良氏の村長としての任期は1951（昭和26）年4月～1967（同42）年5月）、柳宗悦という人が村にきらった。古いものを調べにきらったみたいで村の昔の風習とか、歌舞伎の始まりや倉屋など、私に聞かれた。特に墓場の像は珍しがられた。川向こうにある子どもの像、これを譲ってくれねかと言われた。おれも、迷った。この像もこうた山の中にいるより、東京で大勢の人に見てもらう方が、この小さな像にとって幸せかも知れないと思った……」「しかし不便な貧しい村だが、生まれた檜枝岐にいる方が幸せとも思った。それに昔から村にあるもんだ。貴重な像で大勢の人に見てもらうために東京にやる方がいいかも知れないが、やっぱり東京にはやれませんか、断つた。」と柳宗悦が地蔵尊を欲せられたことを話してくださった。柳宗悦が所望された童子地蔵尊は今も川向の道端の墓地に微笑んでいる。何の変哲もない仏像にしが見えないが貴重な珍しい仏像らしい。」

2022（令和4）年5月の現地調査で、この童子地蔵は1747（延享4）年の建立と判明した。「この年、気候不順の為三万石の年貢が滞る」と会津藩の公式記録『家世實紀』にある。山間寒冷地檜枝岐のさらなる窮状は推して知るべし。それだけに童子地蔵の微笑みもどこか哀しく映る。

3 1954（昭和29）年5月の動き

① 会津若松・喜多方・本郷など

1954（昭和29）年5月22日、柳・河井・濱田ら一行は宗像窯を訪ねている。残念ながら、この訪問記録は「年譜」（『全集』第22巻下）にない。柳と会津の関係を語る時、この訪問の意味は極めて重要であり、欠かせない事実であるため、ここでは他の資料によって柳一行の足取りを復元する。

まずは「年譜」を確認する。「年譜」には「（昭和29年）5月15日、宇都宮市で開催の日本民藝協会第八回全国協議会に出席。16日、益子・大谷・日光などを巡り、17日輪王寺を訪う。宇都宮教育会館で講演。25日に帰宅。」とある。つまり17日の講演から25日の帰宅（東京）までの行程は不明である。

次に補追資料をあげる。下記は柳の宗像窯訪問を

伝える福島民報の記事および宗像窯における記念写真である。この写真は現在、宗像窯に掲げられている。

○福島民報 記事

1 1954（昭和29）年5月23日 朝刊

「会津民芸展 好評を博す」

「日本民芸の第一人者柳宗悦、河井寛次郎の両氏はさきほど会津入りし、檜枝岐はじめ会津の民芸を調査して回った（註：下線筆者）が、両氏を迎えて若松市、商工会議所、会津図書館、公民館共催の会津民芸展が二十・二十一の両日市民公会堂日本間で開かれ好評を博した。出品されたものは本郷焼、慶山焼の郷土色豊かな土びん、茶わん、さらなど二十一点、塗もの十六点、明和、安永、寛政、数化各時代の絵馬、こけし、張子、文工、木彫り、石仏など数十点に及んだ。」

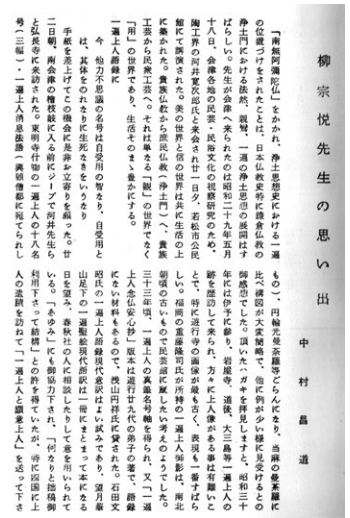
2 1954（昭和29）年5月24日 朝刊

「素朴な粗物を称讃 柳宗悦氏ら 本郷の陶器工場視察」

「既報、民芸学の権威、日本民芸協会長柳宗悦氏、日本芸術院で陶工界の大家河井寛次郎氏など民芸視察団の一行は二十二日午前十一時、大沼郡本郷町の陶器工場にヒョッコリ姿を見せ（註：下線筆者）、同町宗像豊意さん方の粗物工場を視察、製造工程などを視察し、古代日本文化の香りたどようローカル色豊かな角型ニシンばちなどを絶賛し、河井氏は「アメリカ文化はすべて他力本願の文化で、最近その文化から逃れようとする運動が民間に盛んになってきた。文化という定義は体の中から出てきたものでなければならぬ。音楽入りのものばかりが文化ではない。素朴な感のこの粗物などは他の地方では見られない素晴らしいものだ。こんご研究して行ったら、どんどん海外にも売れるだろう。機械力に頼らずこのままの姿で手作りによる特色を出して会津焼の真価を発揮するならば本郷の陶器界に新しい息吹きが与えられるだろう」と力説した。」とある。

以下、細かな記述になるが日程について触れておく。

記事1によれば、



素朴な粗物を称讃
柳宗悦氏ら 本郷の陶器工場視察

既報、民芸学の権威、日本民芸協会長柳宗悦氏、日本芸術院で陶工界の大家河井寛次郎氏など民芸視察団の一行は二十二日午前十一時、大沼郡本郷町の陶器工場にヒョッコリ姿を見せ、製造工程などを視察し、古代日本文化の香りたどようローカル色豊かな角型ニシンばちなどを絶賛し、河井氏は「アメリカ文化はすべて他力本願の文化で、最近その文化から逃れようとする運動が民間に盛んになってきた。文化という定義は体の中から出てきたものでなければならぬ。音楽入りのものばかりが文化ではない。素朴な感のこの粗物などは他の地方では見られない素晴らしいものだ。こんご研究して行ったら、どんどん海外にも売れるだろう。機械力に頼らずこのままの姿で手作りによる特色を出して会津焼の真価を発揮するならば本郷の陶器界に新しい息吹きが与えられるだろう」と力説した。

柳の宗像窯訪問を伝える福島民報（1954年5月24日）

「柳宗悦先生の思い出」
『あゆみ』特別号より

柳らは20日以前に会津を訪れ、檜枝岐ほか会津を調査していることになる。一方、後に詳述する中村昌道は自著『あゆみ 特集号 時宗の念仏』所収の「柳宗悦先生の思い出」の中で、この会津行きを次のように回顧している。要約して述べる。

1954（昭和29）年5月18日、会津各地の民藝・民俗文化の視察研究のため、柳は河井らと会津を訪れ、21日夜には会津若松市民会館で行われた会津民藝展で「美と宗教」について講演された。中村は「美の世界と信の世界は共に生活の上に築かれた。貴族仏教から庶民仏教（浄土門）へ、貴族工芸から民衆工芸へ。それは単なる「観」の世界ではなく「用」の世界であり、生活をそのまま豊かにする。」と講演内容を記し、その直後に『一遍上人語録』中の「今 他力不思議の名号は自受用の智なり、自受用とは、其体をのれなりに生死なきをいうなり」を引用して時宗僧侶としての受け止めを書き残している。次いで中村は柳の東明寺（弘長寺）訪問について「手紙を差し上げてこの機会に是非お立ち寄りを願った。」と、会津入りの前に自寺への訪問を希望していたことを明らかにし、そして「22日朝、南会津の檜枝岐に入る前に（註：下線筆者）柳はジープで河井らと東明寺（弘長寺）を来訪し、東明寺什物の一遍上人の十八名号（三幅）・一遍上人消息法語（興願僧都に宛てられしもの）、円輪光曼荼羅等を見て、この曼荼羅については「当麻の曼荼羅に比べ構図が大変簡略で、他に例が少い様に見受ける」という柳の感想を聞いている。

再度、日程に注目してみると、新聞記事では檜枝岐行きが会津民藝展の前、会津民藝展は20・21日、会津本郷訪問は22日。一方、中村によれば21日夜、若松で講演、22日東明寺（弘長寺）次に檜枝岐へ向かうと記しており、檜枝岐行きの時期が両者で異なっている。

さらに柳らと親交を深めていた会津の陶芸家、瀧



宗像窯を訪ねた柳一行（後列左から4番目が柳）

田項一は柳らの会津入り（会津本郷・檜枝岐）に関して次のように記している。

「（昭和29年）5月15・16・17日の三日間、第8回日本民藝協会の全国大会が栃木県の宇都宮市で開かれることになり、大会終了後柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎の三人が会津若松から檜枝岐に廻りたいという連絡が瀧田のところに入った」それから瀧田は、柳らを檜枝岐へ案内する準備に追われたらしい。

この時の檜枝岐行きを瀧田は「野仏と民芸を訪ねて」（『民藝』360号 1982）で報告（後述）。近藤京嗣も（『陶説』582号 2001）にこの瀧田報告を「貴重なもの」として再掲、さらに瀧田は『福島ので湯』（1982）に再掲している。

瀧田によると、現在、宗像窯に飾ってある柳一行の写真には「昭和二十九年五月二十二日」とあるが、これは「檜枝岐に柳先生達をご案内し三日いてその帰りに宗像窯に寄った（註：下線筆者）時の記念写真であり、今となっては大変貴重なものである」としている。

瀧田は会津若松出立の日を明記していないので疑問が残るが、22日に宗像窯訪問、その3日前なら出発は19日となる。しかし会津民藝展は20・21日の開催。21日夜に柳は講演している上、中村が記した22日の東明寺（弘長寺）訪問と日程が重なり、合わない。

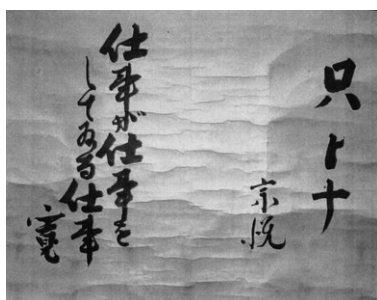
さらに瀧田の同じ報告には次の記述がある。「その頃の本郷の窯は協同窯で、粗物は余り売れなかった。しかし柳、河井先生は鯨鉢や片口、捏鉢、飯胴甕など宗像の粗物を激賞し、早くから『工芸』（筆者註：15号）にも紹介している。その柳、河井両先生が本郷の宗像窯に立寄られたのである。吾々は少しでも多くの人に粗物を始め檜枝岐の石仏や曲物、魚籠、すかりなど郷土の民芸のよさを知ってもらおうと、会津若松市の公会堂で、柳、河井両先生の講演会と沖縄の民芸（撮影：坂本万七）という映画会を開いたが盛会であった。

この時、会津ではまだ民芸協会といったような組織が無かったが、これがきっかけになって民芸協会設立の機運が高まったのである。

この後、（註：下線筆者）先生方は古利恵日寺、萬蔵寺、坂下の立木観音、喜多方の近くの寺などをご覧になってお帰りになったという。』とすれば柳らは、20・21日の会津民藝展が終わった後、会津北部の寺々を訪れそのまま帰路に就いたのであろうか。

こうした柳の足取りに関する貴重な資料がある。それは喜多方市大和川酒造に収蔵されている柳と河井の寄せ書きである。これらは当時喜多方を訪れた柳らが当時の御当主に贈ったものである。この寄せ

書きの裏には「昭和29年5月18日」と記されている。これによって柳らは、17日の宇都宮での全国大会の後、会津に向かい18日には喜多方、19日の行動は明らかではないが、翌



柳と河井の寄せ書き
1954年5月18日（大和川酒造蔵）

20・21日は会津若松での会津民藝品展（21日夜は柳の講演・映画会）、そして22日は東明寺（弘長寺）と宗像焼・檜枝訪問となろうか。しかし、そうであれば次項に示す「②檜枝岐」の瀧田の、会津若松駅から檜枝岐へ直行（東明寺・宗像窯を經由せず）した詳細な紀行文と合致しない。

残念ながら1954（昭和29）年5月の会津に於ける柳らの細かな足取りを確定することはできなかった。今後の研究を待つこととしたい。本稿では5月18～24あるいは25日にかけて、柳ら一行が会津で広範囲かつ精力的に活動したという把握に留める。

7代目の宗像亮一はインタビューに答えて、この時の宗像窯訪問のことを次のように述懐している。初めて柳らに会って「よくはわからなかったけれども励ましを受けて、とても心強く感じた。」濱田庄司が「息子さんを益子に勉強に出さないか」と父（豊意）に話されているのを聞いて、自分はすぐにでも行きます、と言いたかったけれども、父が「益子なんか行って覚えてきたら使いもんにならなくなる。」とすぐ答えてしまった。それを聞いて柳先生も「本郷には本郷の技術もあるんだから」といわれ皆が納得した。内心とても残念だったが、確かに当時すり鉢ひとつでも、益子のかたちのものを売りに来ても会津ではちっとも売れなかったという。すぐ隣県でも、それほどはっきりとした地域性があったことに、地方性が失われている今となっては驚くばかりである。」（近藤「会津本郷焼のこと」『民藝』527号）。

会津本郷焼は磁器が主体となり、陶器は1945（昭和20）年頃には宗像窯だけとなり厳しい状況が続いていたが、当主である豊意の探究心は衰えることはなかったと言う。そうした中で柳らの訪問は、宗像窯・会津本郷焼にとって、その後の快挙へと続く正に天祐であったと言えるだろう。

② 檜枝岐（瀧田項一の紀行文）

瀧田は柳から1929（昭和14）年の苦労の多かった檜枝岐の旅の思い出話を聞いているが、その時柳は、その旅で出会った石仏にもう一度会いたいの段取

りをつけてもらえないかと瀧田に依頼したという。（近藤「瀧田項一と会津の民芸運動五十嵐大祐との出会い」『陶説』582号 2001）。これを受けて瀧田は、先述したように1954（昭和29）年、檜枝岐に向かう。瀧田はこの檜枝岐行きを次の様に報告している。長文となるが貴重な報告なので、以下『民藝』360号（1982）から引用する。

「野仏と民芸を訪ねて 瀧田項一

かれこれ30年も前のことにもなろうか、檜枝岐は秘郷と称ばれるに相応しい辺境の地であった。友と一緒に尾瀬に登る途中立ち寄った。この檜枝岐の道端に点々と立つ野仏の端正な面立ちに暫し仔んだものであった。その美しい野仏たちの群像はよほど私に強烈な印象を与えたとき、何時までも忘れられず、或る日、東京は駒場の柳宗悦先生にその石仏の話をした。未だ還暦を過ぎた頃の柳先生は若々しく元気であった。膝をのり出して、「きみ、それは覚えているヨ。濱田と河井と三人で群馬の沼田から峠を越えて檜枝岐に入ったことがある。途中で雨に降られてズブ濡れになって、河井は馬の背に乗ってたどり着いたが、まるでサンチョパンサみたいだと言って大いに笑ったものだった。その時の檜枝岐はよかったなァ。石ほとけ沢山あって一覚えるヨ。」

私は吃驚した。昭和も初めの頃すでにこの三先生達が全国各地を踏破して民芸品を求め、調査し道を拓いていることに驚嘆した。やがて先生は「前から、あれを写真に撮って本に納めたいと思っていたのだが、君ひとつ世話してもらえまいか」と言われた。

交通機関の全くない所である。山また山の針生峠を越えて更に谷川沿いに山に分け入るのである。今と違って乗用車がこんなに氾濫することも想像だに出来ぬ頃である。（中略）

京都の河井先生を伴い、写真の西鳥羽君をひきつれて会津若松駅に柳先生一行をお迎えしたのである。

せまいジープに皆肩すりよせ合せて身動きすら出来ぬ有様、街をはずればたちまち埃たつ道となり、幌の隙間から無遠慮に埃は入り込み、洗濯板の上を走るような道は、クッションの硬いジープにもろに響き、芦ノ牧を過ぎ湯の上温泉に着いた頃には昼食時間となる。（中略）。

檜枝岐は丸屋旅館に疲れた身を投げ出した頃には、山峡の夕暮れは、はや迫り名物の蕎麦をうつ間に風呂に入れとすすめられる儘に谷川のゴウゴウたる瀬音が風によって這い上がって来るような湯殿は薄暗く、たちこめる湯気の中できょう一日の旅の出来事が、まるで走馬燈のようにボンヤリと流れて行く。（中略）

石仏群は朝霧の中でしっとりと濡れ、小径の端に畠の隅に立ち並び、無縁になったこれらの地藏達は草叢に忘れられ、遠い元禄、享保と云う時を刻みつつ、あるかなしかの微笑をうかべる野仏たちの静かな楚々たる美しさに驚嘆し、歎声を発し肩をなで頭の塵を払い、柳先生は克明な記録をとっていた。

澄んだ小川の水は家々の軒先を廻り唐臼を叩き、ゆるやかなその杵の上下は蕎麦粉を挽くには、丁度よい速度なのかも知れぬ。豊かな透明な水は受け口にジャジャと惜気なく水を注ぎ、一杯に溢れるとその水の重みは杵を宙に持ち上げ、さがった受け口は水をこぼして空になる。杵の重みはすかさずドスンと蕎麦を挽く。水が貯まってギイーともち上げ、水がこぼれてドスンと挽く。ギイー、ドスン、こうした動きは機械の様な理詰めの単調な動作と違って、いつまで見ても飽きぬものである。何時か九州は英彦山麓の小鹿田皿山なる窯場で、これと同じ唐臼で土を砕いているのを見て驚いたことがある。(中略)

萱葺き屋根の深々とした軒下には決まって若水桶が置いてある。黒桧を薄く剥いで曲げ桜の皮で止め、提げる手をつけた径八、九寸の手桶である、正月の朝若水を汲む時、初めて使いおろすので若水桶とこの地では称ぶ。

村の一番奥まった家の平野孫次さんが只一人この仕事を伝えていた。この若水桶に木で据えた注ぎ口を付けたのがある、畠で下肥を施す時の肥桶である。同行の河井先生はまさに欣喜雀躍、「なんて素晴らしいコッタ、肥をやるのにこんな美しいものを用うとは、素晴らしい出来事ではないか」と涙を流さんばかりに喜んだ。本当に驚くべき暮らし方である。美しいものを美しいとしない、特別なものとしなない当り前の生活、それこそ真に美の浄土と言うべきか。今や私達の身の回りには捜し求め歩かねば美しいものはない。私達が花を活け茶室に飾りたい程の手桶で畑に下肥をやる暮らしは、いかばかり水準が高いことかと驚いた。

若水桶ばかりではない。人々の日頃用いる野菜を盛る白く艶やかな木天蓼で据えた籠も、谷川で肴を漁る時の根曲り竹のビクも、実にしっかりと美しく作られ人々の暮らしの中で何気なく、少しも特別でなく、ごく普通に使っている。既にそれらは私達の暮らしの中に失って了ったものばかりで、今、私達は血まなこになって捜し歩かねば見当たらぬ程になって了った。

安っぽい合成樹脂とブリキ細工に囲まれた生活から、こうして数日この村落に過ごすことに依って、物の価値観、美への認識、そして我等はどうあるべ

きかを考えさせられた。

今は既に亡き柳、河井両師と共に捜し歩いた叢の石仏群、曲物の手桶、熊捕りマタギの着る蓑、岩魚採りの根曲り竹のビク、どれもこれも真物の民芸品が人々の中で生きていた。

(中略) この桶や会津本郷焼などは、河井によって全国民藝展に出品され、大きな反響を呼んだ。檜枝岐が世に知られる大きなきっかけになったのである。』

③ 福島県(会津)民藝協会と瀧田項一

ここで会津の民藝運動を牽引した瀧田項一(1927(昭和2)~2022(令和4年))と福島県(会津)民藝協会について触れておく。

1927年、栃木県那須烏山に生まれた瀧田は、東京美術学校工芸科で教授の富本憲吉に、次いで日本民藝館を訪れて柳に会い、柳の薦めで益子の濱田庄司を訪ねる。そして富本の紹介で濱田の弟子となり益子で修業。その後、会津に移住して作陶に励んだ。瀧田を抜きにして会津の民藝運動は語れず、また会津の陶芸史における重要な人物の一人としても不可欠の存在となっていく。

1953(昭和28)年には国際工芸家会議に出席していた柳・濱田らを空港で出迎え、その後、バーナード・リーチと知り合う。そして同年、リーチらを会津・三春などに案内している。

瀧田が指摘した通り、1954(昭和29)年5月の本郷訪問が契機となって、会津にも民藝協会を作る動きが生まれた。同年10月、福島県民藝協会は発足し、1957(昭和32)年9月に日本民藝協会から承認を受けた。最初の事務局は瀧田で、その後、瀧田は中心メンバーとして福島県民藝協会をリードする。

柳らの推薦を受けて渡航した瀧田は3年間のパキスタン、ダッカ滞在から1962(昭和37)年末に帰国。それを待っていたかのように、翌1963(昭和38)年5月には「日本民藝協会第17回全国大会」が会津若松市民会館と東山温泉で開かれ、1975(昭和50)年には会津と広島県宮島、1984(昭和59)年には京都と猪苗代で日本民藝青年夏期学校が開催される。この時、瀧田は会津美術界の中心であった角田行夫や竹田正夫らと共に運営に奔走する。

福島県民藝協会の事務局は1959(昭和34)年の瀧田の海外渡航を機に、同年、会津若松市融通寺町(後に本町)の熊本工業株式会社内、1969(昭和44)年、再び瀧田宅へ。同年、福島県民藝協会は会津民藝協会に名称変更。1974(昭和49)年にうるしや工芸、1988(昭和63)年に中近東民具を扱うアナン、1993年(平成5)年には再びうるしや工芸そして1995年(平成7)年に宗像亮一宅へと移った。そし

て2011（平成23）年に会津民藝協会は解散している。

先述したように瀧田は、濱田のもとで学んだ後、22歳で会津に移り住んだ。洋画を学ぶためのパリ留学経

験もあり、当時、会津の文化人として知られた鈴木宇響（1893～1958）の招きで、瀧田は1949（昭和24）年、喜多方市（旧熱塩加納村）の笹屋旅館（鈴木経営）敷地内にあった鈴木個人の窯で作陶を始めた。ここが会津における瀧田の起点である。



筆塚

この窯の近くには鈴木によって、濱田庄司をはじめ志賀直哉、小林秀雄、川端康成、亀井勝一郎、宮沢賢治、柳田國男、横山大観、竹久夢二、武田久吉、ピカソ、トーマス・マン等々500余名の著名な内外の文化人・文筆家の筆を納めた「筆塚」が建てられている。驚くべき筆塚である。碑名は『白樺』の中心であった武者小路実篤による揮毫である。文化人鈴木宇響の幅広い交友関係を物語っている。1952（昭和27）年、25歳の瀧田は会津本郷の瀬戸町にあった共同窯で作陶。一度、町内を引っ越すが、この頃に共に会津の民藝運動を支えた五十嵐大佑らと出会っている。そして1957（昭和32）年、30歳の時に会津若松市門田町飯寺の阿賀川沿い（現在のケイヨー・デーツ南側付近）に窯を築き、以後28年の長きにわたって本格的に活動する。自らの作陶に止まらず、地元会津の田崎幸一・五十嵐元次・一重孔希らをはじめ川野恭和・設楽亨良・阿部眞士そして外国人陶芸家など多くの弟子を育てたことも瀧田の大きな功績である。そして日本民藝館運営委員や審査員、日本民藝青年夏期学校の講師等々も務めるなど全国組織である日本民藝協会をも支えた。

1984年（昭和59）年、57歳で会津を離れ、故郷である栃木県那須烏山に戻って活動。後に栃木県文化功労者賞、那須烏山市市民栄誉賞を受賞する。こうして瀧田は全国レベルの、白磁を中心とした陶芸家として日本の陶芸史に欠かせない人物となった。2022（令和4）年1月、94歳で生涯を閉じた。

瀧田項一の窯跡
（喜多方市熱塩加納）

この窯の近くには鈴木によって、濱田庄司をはじめ志賀直哉、小林秀雄、川端康成、亀井勝一郎、宮沢賢治、柳田國男、横山大観、竹久夢二、武田久吉、ピカソ、トーマス・マン等々500余名の著名な内外の文化人・文筆家の筆を納めた「筆塚」が建てられている。驚くべき筆塚である。碑名は

4 柳宗悦と中村昌道

（1）邂逅

言うまでもなく柳は民藝運動を牽引した人物であるが、初期にはキリスト教神学の研究など宗教哲学の学者・思想家として知られていた。大正後期に日本の民藝運動を起こす前から晩年に至るまで柳の基盤は宗教であった。初期のキリスト教研究、木喰仏の調査研究、大乘仏教、中でも禅や浄土門に大きな関心を寄せ、妙好人研究、法然・親鸞そして時宗を創始した一遍の思想へと傾倒していく。「柳宗悦は本来的に宗教的人物である。」（水尾：1992）。

柳は『一遍聖絵』の中の一の絵に見入った縁で一遍を知る（「因縁」『南無阿弥陀仏』）。

時宗の僧侶で、会津若松市東明寺（弘長寺）の住職を務めた中村昌道（1927（昭和2）～2014（平成26年））は、1954（昭和29）年から柳が死去する前年の1960（昭和35）年まで、計31通の書簡を柳と交している。柳最晩年の交流と言ってよい。



中村昌道

この時期、また直前の時期に、柳の一遍や時宗に関する論考・著作は急増する。1954（昭和29）年5月の東明寺（弘長寺）訪問から書簡のやり取りはスタートするが、まず注目されるのは、柳の執筆・蒐集活動と2人の交流の時期がほぼ重なる点である。

柳の最高傑作とされる『南無阿弥陀仏』が刊行されたのは1955（昭和30）年であるが、その初出は『大法輪』（1951（昭和26）年8月～1952（同29）年12月）の21回にわたる連載である。「心ひかれる時宗」の発表は1953（昭和28）年5月、「一遍上人」の発表（これは後に新版『南無阿弥陀仏』に収載され中村に送られている）が1955（昭和30）年8月、そして「一遍上人の話」（ラジオ放送）は1956（昭和31）年1月23～28日、「一遍上人の宗旨と一生」の連載も同年（昭和31）年9・10・11月である。

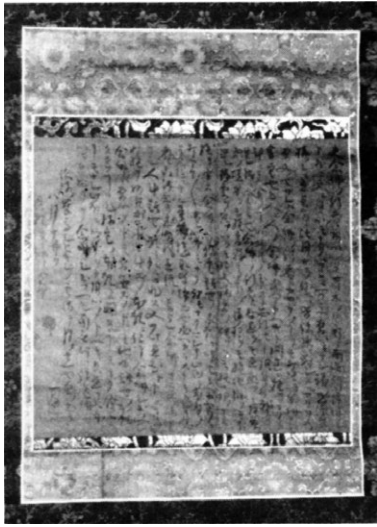
そして柳は1957（昭和32）年9月、中村が主宰する時宗の勉強会「あゆみ会」の会報『あゆみ』への投稿を希望し「一遍上人と顕意上人」を執筆する（後に『全集』第19巻に収載）。

つまり昭和20年代後半から柳の時宗（一遍）に関する著述が増え、時宗への理解と傾倒が強まったそのさなかに柳は中村と出会ったことになる。

次に中村本人との邂逅に加えて特筆すべきは東明寺（弘長寺）所蔵古軸との出会いである。それは

『一遍上人語録』記載の興願僧都に宛てた「一遍上人消息文」である。

「夫れ、念佛の行者用心のこと、示すべき由承り候。南無阿弥陀仏と申す外さらに用心もなく、この外に又示すべき安心もなし。諸々の智者達の様様に立てをかるる法要どもの侍るも、皆緒惑に對したる仮初の要文なり。されば念佛の行者はかやうの事をも打ち捨てて念仏すべし。(以下、略)」で始まるこの消息文を柳は『南無阿弥陀仏』で「その言葉の深さにおいて、優に『小消息』や『鎮観用心』に比すべきもの。ここに最も深い念仏思想の閃きを見られるであろう。幸いにも古写本一軸、会津若松の弘長寺(もと東明寺)に伝わる」として、ほぼ1ページを割いて全文を紹介した。この『南無阿弥陀仏』の初出は『大法輪』11月号で、その掲載は5月の中村訪問から半年後のこと。柳は「私であったらこの一文を、時宗第一の法語と仰ぎたい。誠に念仏の要旨をこれ以上に言い尽くすことは出来ぬ。浄土の法門を想う毎に、この消息を口ずさまぬわけにゆかぬ、金玉の文字と讀みたい。」とし、「一遍上人の話」では「誠にこの一通は、もろもろの仏教の高僧たちが遺された消息文の中でも、特に秀でたものの一つに数えられてよい」と最高の賛辞を贈っている。柳は『南無阿弥陀仏』の最後を、この「一遍上人消息文」で締めくくっているのである。



一遍上人消息文 (東明寺蔵)

(2) 中村昌道の略歴

中村昌道(旧姓:大屋)は1927(昭和2)年、宮崎県に生まれた。僧侶だった父(慶道)に従って大阪の光明寺に5歳まで、その後、静岡県焼津の阿弥陀寺へと移り、以後、小中学校時代を焼津で過ごす。小学5年生の時に日中戦争、中学3年の時に太平洋戦争勃発。1944(昭和19)年、中学卒業後、すぐ兵隊を志願。所沢陸軍航空整備学校に一等兵として入校。以後、陸軍航空整備隊の一員として平壤に渡り終戦を迎えた。その後、ソ連によってウズベク共和国のタシケントへ連行され、捕虜として抑留。運河掘りや道路工事などの過酷な作業に3年間従事した。1948(昭和23)年10月に復員。舞鶴に到着し

ている。

1949(昭和24)年、僧侶の資格を得るべく、神奈川県藤沢の時宗本山清浄光寺(遊行寺・藤沢道場)の宗学林で修行。その後入学した大正大学を1952(昭和27)年に中退し、弘長寺住職であった中村正隆氏の次女、明枝さんと結婚して会津に移り住んだ。

1960(昭和36)年には東明幼稚園園長となり、1962(昭和37)年には弘長寺本堂落慶に合わせて会津若松市内の時宗寺院4寺(弘長寺・東明寺・西光寺・常念寺)を合併。当麻山東明寺(三当麻の一つ)として、会津における時宗の拠点とした。翌年、弘長寺住職56世当主となり、以後、東明寺と弘長寺の住職を兼ねて熱心に執務され、1984(昭和59)年頃には会津仏教会会長となる。また時宗教団からの信任厚く、1988(昭和63)年には時宗審査委員となった。また本山から『時宗辞典』(時宗宗務所教学部:1987)の教理解説を依頼され、37語の解説が同書に掲載された。時宗への深い造詣からであろう。その後も中村は法語等を『在家仏教』『大法輪』などに執筆している。生前、中村と親交があった大正大学の長澤昌幸氏によれば、中村は先達らと交流しつつ、ほぼ独学で時宗を学んだということである。そして2003(平成15)年12月、中村は法主候補者に就任している。

先述したが中村は地元で時宗の勉強会「あゆみ会」を作り、会報『あゆみ』や、その特集号を刊行している。『あゆみ』は1953(昭和28)年頃から発行され、1964(昭和39)年12月の37号で廃刊となった。(特集号は11号まで続いた。)書簡を読む限り『あゆみ』は9号以降、刊行ごとに柳に送られている。しかし、誠に残念ながら『あゆみ』はごく一部が確認されるのみで、現在、探索を続けている。

また中村は檀信徒の方々と共に一遍ゆかりの地やインドなど仏教関連の土地を訪ね歩いた。また太平洋戦争で亡くなられた人々の霊を慰めるためガダルカナル島にも慰霊巡礼団として訪れ『鳥になりたいガダルカナル島戦没者慰霊巡拝団』『聖地に行くインド仏跡巡礼』『愛と祈りの旅 ミャンマー・タイ・フィリピン』など平和と祈りの著作を残してい



『あゆみ』第23号(1958)

る。

さらに地元の活動として特筆されるのは、戊辰戦争で死去した西軍兵士を弔う墓前祭である。東明寺には若松城下で落命した敵方の薩摩・長州などの兵士170余柱が眠る西軍墓地がある。悲しみに敵味方なし・・・中村は1953（昭和28）年に先代住職らが始めた墓前祭を受け継ぎ、半世紀以上にわたって毎年、墓前祭を執り行って兵士の冥福を祈った。『明治戊辰戦没西軍墳墓誌』の著作もある。

中村は「戦争は二度としてはならない」と自著『迎病記』にも記しているが、シベリア抑留を含む苛烈な戦争経験、西軍墓地の供養や巡礼などを通して博愛と平和への祈りを大切にされた方であった。柳・中村の交際は少なくとも約8年と短かったが、私は平和への思いは2人の強く深みのある結節点であったと考えている。

2014（平成26）年、『中外日報』は「中村院代（弘長寺住職）が体調不良で法主候補辞任。60日以内に法主候補者選挙が行われる。」と報じた（2014（平成26）年7月2日号）。そして、中村は11月5日、87歳で遷化している。

（3）書簡

柳から中村に宛てた書簡20通は、既に『全集』21巻下等に掲載されている。しかし中村が柳に宛てた11通は未公開であり、今回、初めて公開する。柳家・中村家の両御遺族及び日本民藝館の御協力に対し、衷心より改めて深く感謝申し上げたい。

ここでは時間の経過が辿れるよう、全31通を時系列で掲載する。『全集』第21巻下によれば、同巻に収載された柳発出の書簡は計4350通である。宛名の人数は265人。染織家外村吉之介宛の416通を筆頭に、織物の森永重治宛294通等が続く。一方、中村宛の書簡は20通であって全体から見れば極めて少ない。編集者である熊倉功夫も宛名人別書簡数から見る限り、中村を「主要な人物」に挙げてはいない。柳との関係に関して中村に触れた書・論考等も皆無である。しかし以下に見るように、計31通の書簡は最晩年の柳を理解するための重要な手掛かりとなる。

柳と中村が具体的にいつ知り合ったかについては資料がなく厳密に特定することはできない。この頃、既に柳は民藝運動の大家として押しも押されぬ著名人であり、『美の法門』『禅と美』（1949）、『妙好人因幡の源佐』『因幡の源佐』（1950）、『大法輪』への「南無阿弥陀仏」の連載（1951～54 計21回）、「物偈」（稿本）（1951）、「妙好人の存在」（1952）そして「心ひかれる時宗」（1953）等々、東明寺（弘長寺）訪問以前に浄土門（特に浄土真宗と時宗）などの仏教関係の著作等を次々と発表していた。当然、

こうした柳の著作や動きを、僧侶である中村は承知していたはずである。

柳らの1954（昭和29）年5月の会津行きについては先述したが、次に掲げる5月11日付の書簡1で中村は柳に、会津若松を訪れた際には東明寺（弘長寺）を訪問するよう依頼し、柳も「お会いの上」と応じている。また同書簡1によれば「一遍上人に関する古記録」を中村は既に柳に送っていることから、1954（昭和29）年あるいはそれ以前に、中村から何らかのアプローチがあったことは間違いないものと思われる。

以下に2人の書簡を紹介する。理解を助けるため書簡ごとに註を入れ、その書簡に関する柳の動きなども補うこととする。なお、以下書簡番号とは『全集』第21巻で用いられた整理番号である。

【書簡1】 1954（昭和29）年5月11日 柳→中村
宛 はがき 書簡番号：2857
若松に参る折は是非お立寄したき意向であります。一遍上人に関する古記録おしらせ下され有難く存じます。萬々お会いの上 五月十一日

5月22日午前、柳はこのはがきの通り、東明寺（弘長寺）を訪れて中村に会い寺室を見学した。その時、柳が後に「時宗第一の法語」と絶賛した『一遍上人語録』中の興願僧都宛消息文の古軸に出会っている。

【書簡2】 1954（昭和29）年11月24日 柳→中村
宛 はがき 書簡番号：2900
度々お便り下され有難く思ひます。愚一上人の歌、お届け下されし事、深く感謝します、時宗の宗風高揚のため何卒御精進のほど祈って止ましません、御上京の折もあらばお立ち寄りください一筆お禮迄

註：愚一上人 横浜市浄光寺初世森證善師（明治期）のこと。

柳は浄土門、特に親鸞や真宗に比べ、それまであまり顧みられてこなかった一遍上人や時宗の興隆を願う旨をここで記している。後述する書簡12・15・21・22などにもその思いがよく現れている。

【書簡3】 1955（昭和30）年7月25日 中村→柳
宛 封書

拝啓 十九日会津に帰りました。四日は月曜日でお会い出来なく残念でした。十八日静岡より上京したのですが、又月曜日にて見学が出来ず、今度上京したさいに是非お寄りしたく存じます。新論の「一遍上人」読みました。本山の役僧や又、

隆宝上人の机の上にも新論がのって居りいろいろ話して来ました。

「あゆみ」九号を八月中にお送り致す予定にしております。

今、安来の加藤実法師（八十翁）の「播州問答解説」と「時宗安心抄」をうつつて居ります。次にお願いを申し上げます。仏教講演会・地藏講などの集りに仏旗をかかげ、又法語等の掛軸をして荘厳をしようと思ひます。先生に御洗筆をお願いしたいのです。私の好きな言葉をあげますと、

- 1 「南無阿弥陀仏」
- 2 「俱會一處」(小経)
- 3 「一味和合」(語録)

宗学林時代の佐々木学頭さんは廿七年に死去され、今私の先達とおしたい申し上げる先生に特にお願いした次第です。

あつかましい願ひと思ひますが、心のはげましとしたいのです。

今年は異変の夏、御健康を御祈り致します。

七月二十五日 会津若松市
 中村昌道
 柳宗悦先生

註1：『新論』（新論社）第1巻第2号（1956年8月）に柳は「一遍上人」を寄稿している。

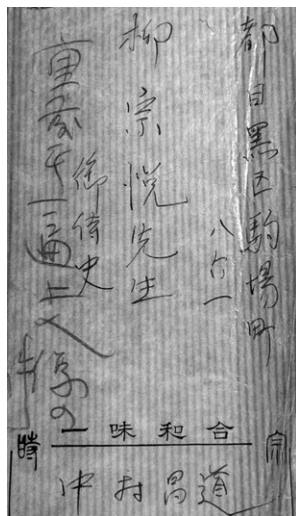
註2：隆法上人 時宗法主・遊行71代 隆宝上人（藤井隆然 1888～1981）。

註3：『あゆみ』は中村が主宰した時宗の勉強会「あゆみ会」の会報。

註4：『播州問答』一遍が説き、持阿が筆記したとされる。一遍が播州へ遊行した際の持阿との問答と伝える。

註5：『播州問答解説』鳥根県安来市向陽寺の加藤実法師（『総合仏教事典』などを執筆）による問答解説。中村の『持衆 あゆみ』にも掲載されている。『時宗安心抄』は一華堂切臨の『時宗安心大要』のことか。加藤氏の著作とは、その内容から『播州問答解説』のうち、安心章のことであるうか。

註6：俱會一處 阿弥陀経の「諸上善人、俱會一處」からで



中村使用の封筒
(左の鉛筆書きは柳の直筆)

た言葉。多くの人々が共に一處に会同すること。阿弥陀経では阿弥陀仏の浄土に往生すれば、もろもろの上善人（宗教的善を修得した人）とそこで会うことができる、という。

註7：一味和合 三宝（仏法僧）の一つである僧侶の意味を説明したことばで、比丘（＝僧）たちが心を一つにして一致団結することを示す仏語。中村は衆生が仲睦まじく暮らす世界であることを願う、という思いを込めて、自身の封筒などに印刷するなど、好んで「一味和合」という言葉を用いている。

書簡4 1955（昭和30）年8月31日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：2970

永い間旅をしていて不在、失禮しました。ご依頼の文字は、柄でないのですが、何かいつかお届けします。先日伊豫に参り、岩屋寺、道後、大三島等々一遍上人の跡を歴訪して来ました。

斯道のため御精進いのり上げます。

不取敢一筆

註1：岩屋寺、道後、大三島 いずれも一遍上人所縁の地。岩屋寺は愛媛県上浮穴郡久万高原町の菅生の岩屋で一遍の修行の地。海岸山奥之院岩屋寺は現在、真言宗豊山派に属する。

註2：愛媛県松山市郊外の道後温泉近くに時宗寺院：宝厳寺がある。

註3：伊豫一宮とされた大山祇神社は愛媛県今治市の大三島という島に鎮座している。大山祇神社は、全国の大山祇神社の本社で、三島大明神とも称されたことから、静岡県三島神社と同様、全国の三島神社の本社とされる。

書簡5 1955（昭和30）年10月12日 中村→柳宛
はがき

拝啓 待ちにまった「南無阿弥陀佛」特製本が落手し父と二人で読んで居ります。すばらしさに驚嘆して居ります。浄土門の人にだけでなく、多くの青年が読んでほしい。本書の発刊に御慶び申し上げます。（近かく上京出来る予定です。） 敬具

註1：『南無阿弥陀仏』は1955（昭和30）年8月15日発行。特装版と並装版がある。

書簡6 1955（昭和30）年11月16日 中村→柳宛
封書

過日上りましてお話やら民芸品等を見て嬉しく思いました。昨夕やっとな雪国の山奥へ帰りました。

① 宗祖上人の自画像は鎌倉国宝館にあり、館長さんに頼みました。もう着いて居ることです。

私の方も来ていましたから。文字金粉（パク）、口の朱が印象的でした。

- ② 「法語集」の方は浅山師がもって居ります。写真のこと話しました。本山へ四回も来られたがいつも留守にて会えず、帰る前日電話にて話しました。
- ③ 八王子市市川口字下川口道場法蓮寺住持田野倉徹宗八王子駅ヨリ五王自動車にて川口まわりにて川口役場前下車徒歩一〇分)

一遍上人像 丈三尺立像、木彫寄木造り、玉眼嵌入、室町時代頃のもの、至宝にて国宝として申請すべきもの、(氏家住治郎氏による)

その他、掛幅装、弥陀三尊、二幅対、二組 座像あり、写真うまくとれていたら御送り致します。

- ④ 当麻の一遍上人 写真同封、卅五才の御時は疑問です、

長島足下によると「弘安五年行化に立ち玉はんとし信徒の願望に任せ水鏡により顔面を照し見て上人自らの頭像を彫みける、以下弟子の眞教知得及び関山通安が協力して完成せしむ如此尊像は国宝以上の国宝なりと信じているト。

- ⑤ 帰りに群馬県碓氷郡板鼻町甲二一〇一 聞名寺 西島恒徳僧正による、一遍上人開山にて
- a 十二光箱の一あり、朱にて七とあり、大溪のものと同対ならんと思う。
歓喜光仏。帯入れてせう、像にあるものと同じでせう、(図あり)
- b 五條の黒袈裟あり
- c 持蓮華 二本 (図あり)
- d 念珠 (図あり)
- e 佛子
- f 名号 一遍上人。四代吞海上人、一五代上人、四二世南門上人
(これは本尊名号で立派です)

- ⑥ 横浜市戸塚区東俣野東海道の畠中に碑があります、木食上人より年代少しあとのようすがつづくわえておきます

右 天下大平聖朝安穩

正面 南無大師遍照光剛

裏 觀正行者御開眼

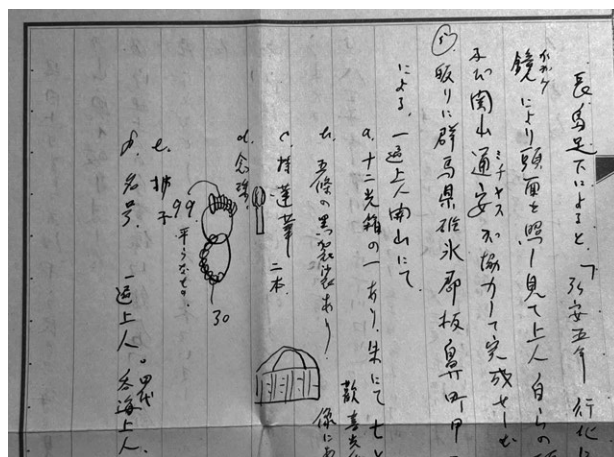
木食観音

文政四辛巳年二月七日

左 文政三庚辰年十二月吉日

(民藝館のにこやかな地藏尊を拜せば「いかり」は消え失せます いいお顔です) 敬白
十一月十六日朝

(昨夕帰りました 雪国独特のさびしさが山にも野にもあふれ取りのこされた柿のみ赤く美しい)



書簡6の一部

この書簡によれば中村は上京して柳に会っている。

書簡の中身としては、

- ① 一遍上人画像の写真?を既に手配したこと
- ② 時宗の研究者である浅山円祥氏に、法語集の写真?を依頼したこと
- ③ 八王子市市川口の法蓮寺(時宗)にある一遍上人像の情報提供
- ④ 当麻道場無量光寺の一遍上人像の写真を同封したこと
- ⑤ 群馬県碓氷郡板鼻にある聞名寺の寺宝に関する情報提供
- ⑥ 横浜市戸塚区東俣野東海道の畑にある文政期の木喰観音碑の情報提供
- 註1: 浅山師 浅山円祥(1911~76) 時宗宗学林教授で時宗教学の最高権威。
- 註2: 当麻 当麻道場無量光寺のこと。神奈川県相模原市南区にある。もと時宗当麻派本寺。ここには一遍自刻の伝承をもつ立像がある。
- 註3: 長島足下 長島大道のこと。出身は府中称名寺であり、このとき無量光寺住職。『如是我観』(1952)の長作がある。
- 註4: 行化 修行を終えて教化のために巡り歩くこと。
- 註5: 眞教 遊行上人2世=他阿上人。一遍の最初の弟子。1289(正応2)年、遊行上人に就任。時宗教団の基礎を築く。1304(嘉元2)年、無量光寺を創建。1319(元応元)年1月、無量光寺で死去。83歳。大上人。
- 註6: 知得 智得の誤りか? 智得上人(1261~1320) 遊行上人3世。1304(嘉元2)年、遊行上人に就任。1319(元応元)年、無量光寺に住す。1320(元応2)年7月、無量光寺で死去。60歳。中聖。中上人。著作に『知心修

要記』『念仏往生綱要』『三心料簡義』があり、和讃として『弘願讃』『称揚讃』『六道讃』がある。

註7：関山通安 当麻無量光寺周辺に存在する関山氏のことか？関山氏は河野氏の分家で家来、一遍に随従して当麻に来たという伝承がある。当麻派の伝記である『^{まさんしゅう}麻山集』には、一遍の御影に関して『関山入道』が登場する。

註8：聞名寺 群馬県安中市板鼻にある時宗の寺。

註9：持蓮華 仏具の一つ。蕾の蓮華をつけた蓮莖の形に作ったもので、合掌礼拝の時、これをその掌中におさめ、中指と中指の間に挟んで用いる。時宗特有の僧具の一種である。46ページ中村昌道氏の写真参照。『^{まさんしゅう}仏教考古学講座』第5巻（仏具）には中村が見たと思われる（書簡6・30）群馬県聞名寺の室町期の持蓮華2本が掲載されている。

註10：^{もくじき}木食上人 ^{もくじきぎょうどう}木食行道（^{もくじきごぎょう}木食五行）（1718（享保3）～1810（文化7年））。江戸時代の真言宗の僧。甲斐国の人。22歳で出家し、45歳で木食戒を受けて生涯その戒を守った。日本廻国・千体仏造像を發願して諸国を遊行し、肉塊の盛り上がりを強調した特異な木彫仏を残した。柳が研究したことでも有名。

書簡7 1955（昭和30）年11月23日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：2995

遊行寺や法華寺の一遍上人写真お届け下され厚く感謝、後者、実物を見ないと鎌倉時代のものとは断定出来ませんが、恐らく足利期のものではないでしょうか。方々に上人像があることがわかり、有難いことです、何しても遊行寺の（以下表面余白に）画像が最も古いと思ひます、表現も一番すばらしいものです、

一筆お禮迄

書簡8 1956（昭和31）年1月1日 中村→柳宛
はがき（年賀状）

1956 賀正

よろしく御指導をお願い致します。

御幸福を御祈り致します。

昭和卅一年元旦

会津若松市川原町五

中村昌道 明枝 正眞 昌史

書簡9 1956（昭和31）年7月2日 中村→柳宛
はがき（暑中見舞い）

暑中御見舞申し上げます。

「南無阿弥陀仏」何度も読みかえて居ります。

「色紙」を頂き御礼もせず心苦しく思って居ります。

「なめこ」を送りました。

大根おろしとの味覚は大変よいと思います。

今日は梅雨も晴れて夏らしき青空に白雲が浮かび気持ちのよい日です。

書簡10 1956（昭和31）年7月6日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：3063

「なめこ」をお送り下され、小生の好物とて大変有難く思ひました、東京では中々高くて、こままります、或は地元でもさうなのかと思はれ、恐縮です、御東上の折、お立ち寄り下さい、御尊父様よろしく御伝言下さい、

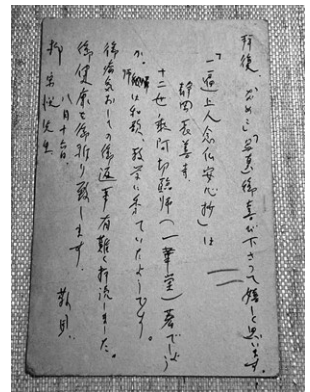
書簡11 1957（昭和32）年8月19日 中村→柳宛
はがき

拝復「なめこ」「写真」御喜び下さって嬉しく思います。「一遍上人念仏安心抄」は静岡長善寺、十二世乗阿切臨師（一華堂）著でしょうか。師は和歌、教学に秀でていたようです。

御病氣おしでの御返事有難く拝読しました。

御健康を御祈り致します。

敬具 八月十二日
柳宗悦先生



書簡11

註：「一遍上人念仏安心抄」は中村の回答通り12世乗阿切臨の作である（再掲）。

書簡12 1956（昭和31）年11月9日 中村→柳宛
封書

拝啓 其後御無沙汰ですが御壮健の御事と存じます。「大世界」九・十一月号を読みしました。一遍の歴史的位置がはっきりと知らされました。多くの人々が一遍への再認識をすることでしょう。それにつけても「新論」にのせられた「一遍上人」何度も読み返し、ぜひ若い人々に読んでもらいたく、三百部「あゆみ会」にてタイプ印刷にて出したいと思ひますがいかがですか。島根大の河野憲善師の「一遍教学の基礎的立場」と二編を一緒にと思っています。一遍の写真は八王子の法蓮寺のをとを考えています。おゆるし願えればとペンをとりました。

昭和卅一年十一月九日
会津若松市川原町五

中村昌道

柳宗悦先生

註1：柳は『大世界』第11巻第9～11号に、それぞれ「一遍上人の宗旨と一生」、「同（其の二）」、「同（其の三）」を寄稿している。

註2：他阿一雲（本名：河野憲善 1910～2004）。兵庫県神戸市生まれ。時宗法主・遊行73代、藤沢市清浄光寺56世住職（藤沢上人）。島根大学名誉教授。専門は日本思想史。

書簡13 1957（昭和32）年8月15日 柳→中村宛
封書 書簡番号：3122

度々お便り及あゆみ頂き恐縮 特に空也念仏踊の
写真は有難いものでした。

小生舊臓より大患にかかり今以て横臥中、中風のため
手足不自由で閉口しています。幸右手はきくので、
鉛筆で時々書きます。

貴誌のため書きたい原稿が二つあるのですが此の暑
さのため衰弱し思ふにまかせません 併し立秋の聲
も聞いたので九月に入ったら、少し回復するかと思
ひます、

近頃は内容が良いものにせよ間違ったものにせよ一
遍上人に関する記事が大変多くなり有難い事に思ひ
ます

小生が今書きたいのは

（一）四国に上人の遺跡を訪ねて

一遍上人と顕意上人

又は 〃 と「安心決定抄」と題してもよろしく
いつか書きたいと思ひますが書齋にないので文献
も見ること出来ず思ふにまかせません

柳宗悦

病床にて 中村昌道様

八月十五日

最近「一遍上人念佛安心抄」と云ふ寛文頃の本を手
にしました 珍本と思ひます 今朝なめこ小包安着、
大好物とて千萬の感謝

書簡中、最も注目すべき一通である。この書簡の
約1か月後、9月23日発行の『あゆみ』に、柳の念
願通り「一遍上人と顕意上人」は掲載された。背後
には中村の迅速な動きがあったものと思われる。な
お、柳は1956年末に大患を患って倒れており、書簡
12以降は半身不随、横臥の身をおして筆を執ってい
る。

註1：八葉寺 福島県会津若松市河東町にある寺。
会津高野山とも呼ばれる。阿弥陀堂は1950
（昭和25）年に国指定重要文化財・建造物に
指定された。空也上人により964（康保元）
年に建立と伝わる。文禄年間に再建。会津地

方には古くから「木製五輪塔」という小さな
塔に、亡くなった親族の遺品などを入れて奉
納し供養する風習があり、14000点を超える
五輪塔は、境内の舍利殿に納められている。
8月の会津の高野山参り（盆迎えのお参り）
や空也念仏踊り（県指定重要無形民俗文化
財）は有名。

註2：中風 悪風に中る意。脳卒中の発作の後遺症
として主に半身不随となる状態。中気。

註3：顕意上人（1239～1304年）。鎌倉時代後期の
浄土宗西山派の僧。字は道教。西山義深草流
の祖立信円空に師事し、京都嵯峨の釈迦院竹
林寺で布教後、同流の本寺である深草の真宗
院に住持して一流の中心となった。『観無量
寿経四帖疏楷定記』『当麻曼荼羅聞書』『浄土
宗要集』『浄土竹林鈔』『奏上法語』などの著
作がある。

註4：『安心決定抄』二巻。著者不詳とされる。本
願寺派では蓮如の解釈に基づいて重視してき
た。弥陀が十劫の昔に成就した正覚の一念に
かえることによって衆生は救済されるとする
「機法一体説」が展開され、衆生の自力を廃
した仏の絶対他力を強調する点に特色がある。
柳は「私が読んだ浄土系の和語の仏書で、最
も感銘を受けているものの一つは『安心決定
抄』である。」と「十八 仮名法語」（『南無
阿弥陀仏』）で述べ、また「色紙和讃」（『蒐
集物語』）では「美の経典と思える」と評し
ている。そして『あゆみ』に寄稿した「一遍
上人と顕意上人」では、長く著者不明とされ

四、一遍上人と顕意上人

柳宗悦

「安心決定抄」は古来浄土真宗で最も大切にされて
聖教の一つである。それ故、真宗聖典でも編むと、この
聖教をぬかずやうな事は決してない。この伝統は特に蓮
如上人以来つゞくもので、江戸時代の真宗の学者のこの
聖教に関する著作も一、二に止らぬ。蓮如上人はこの抄
をいたく尊敬されて、紙が破れるほどに熟読された一書
であった。さうして此の本の中から、読む毎に、金を掘
るやうな感じたときへ云はれた。
所が不思議な事に、この聖教は誰の手になる著作か、
今以て分らず、議論誠にまちまちである。中で一番多く
の人から支持されてきたのは、竟如上人の作といふ説で、

「一遍上人と顕意上人」（部分）
『あゆみ』特別号より

てきた『安心決定抄』の作者は顕意上人である、とする説に賛意を表している。

註5：「一遍上人念佛安心抄」(『大日本佛教全書第69巻』所収) 十二世一花堂切臨(1591～1671)の作。切臨は黄台山金光寺七条道場の22世住職。二条・冷泉両家歌学を一華堂乘阿に学び、師説を軸に宗祇以下諸抄を集成。『源義弁引抄』の著作がある。「一遍上人念佛安心抄」は一遍の念仏安心について仮名交じりで肝要にまとめられたもの。

書簡14 1957(昭和32)年10月29日 中村→柳宛
はがき

拝復 会津の山々は紅葉で美しくなりました。御体の具合はいかがですか。
「無有好醜の願」御送り下され心から嬉しく厚く御礼申し上げます。念仏の有難さが「物」をとうしてしみじみと味えます。文化の日お祝申し上げます。

敬具
柳宗悦先生
中村昌道拝

註：「無有好醜の願」は1957年10月24日刊行。柳は刊行後、すぐに中村に送っていることがわかる。

書簡15 1958(昭和33)年6月30日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：3385

その後お元気ですか、今日他阿上人筆の和歌一軸を持ってきた人があります 五十七代上人の筆とありますが、此上人は必定江戸時代の方と思ひますが、何と云はれた方ですかお知らせ下さい(表面余白に)最近仏縁あって一遍上人の真筆名号軸を得ました、

次回御上京の時お見せしたく思ひます。

註1：57代の道号は「他阿一念」、因位は「暢音」。一念上人(1780～1858)。

註2：柳が入手した「伝一遍筆」とされる名号軸とは『仏教絵画』(白土：2022)の図16・17の六字名号のいずれかであろうか？ 白土によれば入手時期は「1958年以降」とされている。

書簡16 1958(昭和33)年7月6日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：3387

あゆみ七月號拜誦、一遍上人語録現代語意識はよい試みと思ひます。小生病気が回復しましたら時宗の為何かもっと盡したい所存ですが、此の病氣中々厄介な性質あり、牛歩遅々たる回復です。

註1：中村は『あゆみ』誌上において、石田文昭氏(『意識一遍上人語録法語』1975の著作あり)らによる一遍上人語録の現代意識を連載した。

書簡17 1958(昭和33)年7月25日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：3411

小生の得た「一遍上人念佛安心抄」は遊行卅代の弟子の著と巻末にあります卅代は一花堂乘阿にや何年頃の上人にや 御一報下さいませんか 右の本は宗門ではよく知られているものにや(表面余白に)先日は写真をありがとう存じました。

註：遊行30代は他阿有三(1512～83)。1563年(永禄6)年、遊行上人に就任。1583年(天正11)年、越前・西方寺で死去。72歳。「一遍上人念佛安心抄」は十二世切臨の作(再掲)。師僧は遊行33代他阿満悟。おそらく柳の誤解と思われる。

書簡18 1958(昭和33)年7月31日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：3420

早速お返事感謝 一昨日浅山圓祥氏来訪 同君も「念佛安心抄」の版本は始めての由でした。語録のない材料もあるので同君に貸しました。一遍上人名号は、燻染をとる事が出来る由で表具師に廻しました。

右御禮迄

書簡19 1958(昭和33)年9月?日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：3497

君のお影で重藤氏が見え一遍上人画像を持参されました 南北朝頃の古いものでありました。譲受ける事、お希ひしました、価格の事で、どうなるかまだ分かりませんが大変よいものでした。

書簡20 1958(昭和33)年11月17日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：3541

お手紙拝見、何なりと拙稿ご利用下さって結構ですが、小生は未だに書齋に行けず自身で取捨することが容易でなく、若し貴兄のよいようにお希ひ出来れば此上なく思ひます。

なめこ好物とて何より有難くいつもお志頂き恐縮の至りです(表面余白に)一遍上人御影、まだ入手出来ません 適当な人に譲られる内約はうけていますが。

書簡21 1959(昭和34)年1月24日 柳→中村宛
はがき 書簡番号：3588

「時宗の念仏」二部落掌 今度の号は大変よい編

纂と思ひました、宗門の為の御尽力深く感謝、小生も健康が復せば何かもっと尽したき念願です。

書簡22 1959(昭和34)年7月7日 柳→中村宛
はがき 書簡番号:3748
お見舞頂き恐縮千万 好物とて大変有難く思ひました

望月師の一遍語録現代語訳、一冊にまとまって、本になる日を希み春秋社の人に相談しています。どこか他で出版が既にきまっているのでしょうか、

お禮方々お尋ね迄

柳は中村が『あゆみ』に連載していた一遍上人語録の現代語訳を春秋社から刊行するという案を持っていたことがわかる。

註:望月師 望月華山(1897~1973)真光寺二十四世住職)

書簡23 1959(昭和34)年8月5日 中村→柳宛
封書

前略 大変暑い日が続きますが会津はさすがに朝晩は涼しく、寝苦しいことはありません。さて福岡の重藤隆司氏から一遍上人画像に関するハガキを頂きました。

先生におゆずりしてもよい意向の様であります、価格の点が不明ですので、御聞きして呉れとの事です。私も見て居りませんので評価出来ませんが、先生ならば妥当な所お分かりと存じます。

重藤氏からはいくらならばということ云って来て居りません。よろしく願いいたします。

御体を御大切に御祈申し上げます。

八月四日
中村昌道
柳宗悦先生

書簡24 1959(昭和34)年9月29日 中村→柳宛
封書

拝啓、其后御体の具合はいかがですか。

「あゆみ」23号が出来ました。

一遍上人画像の件

価格は百万円以下では稀少価値を考慮して無理とのことです。

しかし目下重要美術品として文部省で検討中、今暫く保管するよう云われているとのことです

中村昌道
柳宗悦先生

この書簡には、『あゆみ』23号と「市制六十周年記念 会津若松市社寺名宝展」目録が同封されてい

る。この名宝展には東明寺(弘長寺)から「円輪光曼荼羅」「一遍上人筆 十八名号 三幅の内一幅」が出品されている。中村は柳の依頼(書簡25)を受けて写真を送り、これに対し柳は10月12日の手紙(書簡26)で礼を述べている。

書簡25 1959(昭和34)年9月30日 柳→中村宛
はがき 書簡番号:3828

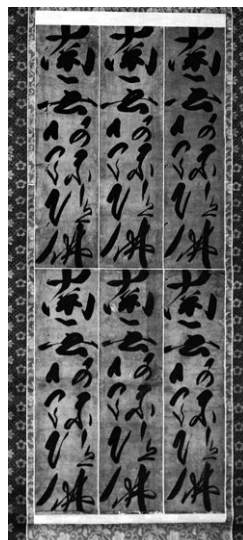
あゆみいつもお届け下され感謝、

お手紙を拝見し一遍上人画像は断念するより仕方ないと思ひます。素人からものを買入れるのは、とても厄介で、いつも苦い経験を嘗めさせられるので一旦中止にしたいと思ひます。

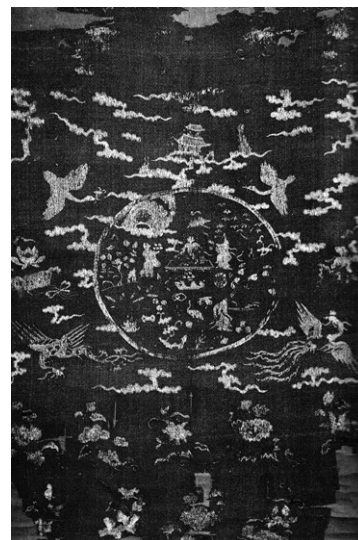
お送り下さりし名宝展目録中二二番に圓輪曼荼羅があるを知り是非その写真をお希ひしたいのですがお世話下されませんか、目下当麻マンダラの事を調べているので大変ほしく折入って右お希迄 写真代は御一報被下次第お送りします。

註1:円輪光曼荼羅 目録記載の東明寺(弘長寺)寺宝(会津若松市指定文化財)

註2:当麻マンダラ 当麻曼荼羅とは奈良の當麻寺に伝わる中将姫伝説のある蓮糸曼荼羅と言われる根本曼荼羅の図像に基づいて作られた浄土曼荼羅の総称。密教の胎藏界・金剛界の両界曼荼羅とは無関係で、浄土曼荼羅という呼称は密教の図像名を借りた俗称。正式には浄土变相図。



草書十八名号
(三幅対のうちの一对)



円輪光曼荼羅

書簡26 1959(昭和34)年10月12日 柳→中村宛
はがき 書簡番号:3843

柳宗悦 病床にて

写真を早速お届け下さって大変有難いことでした。

当麻の曼荼羅を見た眼にはとても特別な構図なのに驚きました、
河野氏から送って下さるといふ写真を楽しみにしています。

不取敢一筆お禮迄
(表面余白に) 写真代ご一報下さい

書簡27 1959(昭和34)年10月21日 柳→中村宛
はがき 書簡番号:3851
お手数を煩はせて恐縮千萬 繡のマングラは中々珍しいものに思ひます、唯当麻マングラに比べ構図が大変簡略で、之も他に例が少い様に見受けま
す
お禮迄

書簡28 1960(昭和35)年1月21日 柳→中村宛
はがき 書簡番号:3925
又々好物の品お届け下され深謝。早速御馳走になる事と思ひます。近々小著「南無阿弥陀仏」の新版(普及版)が出ますので、一本をお届けしたく思っています。一遍上人の一文を、新しく添へてありますので。

右不取敢お禮迄 正月廿一日 柳宗悦

註1:『南無阿弥陀仏』の新版(普及版)は昭和35年1月30日発行。新たに「一遍上人」が収載されている。

書簡29 1960(昭和35)年8月4日 柳→中村宛
はがき 書簡番号:4106
とんだ御厄な事をお希ひしますが、時宗で用いるじ蓮華を一本民藝館で求めたいのですが、機会があったら心に留めておいて下さいませんか、売物はないと思ひますが、或いは寺で余分を所持している場合もあるかと考へられ右お希ひしたくおのハガキを書きました、とんだことをお希ひし恐縮千萬です。

書簡30 1960(昭和35)年8月7日 中村→柳宛
はがき
前略 おハガキ拝見致しました。「持蓮華」のこと、あちこち問合せました。「あゆみ」次号にも書いて心あたりを探します。私は板鼻で一遍上人所持と伝わる持蓮華と念珠を見ました。ツボミがずんぐりしていて「え」が短かかったようです。念珠の玉はひらべったいものでした。古いものは案外少いようです。

八月七日

註:書簡6に記された群馬県碓氷郡板鼻町の聞名寺に蔵されている持蓮華のこと。中村は柳の依頼

に答えるべく努力していることがわかる。

書簡31 1960(昭和35)年8月9日 柳→中村宛
はがき 書簡番号:4115
持蓮華の事 とんだ御配慮を煩はし恐縮千萬です。あの形式は他宗にないので、時宗の仏具の一つとして是非入手したく前から念願していました。おついでの時又お立ち寄り下さい。真光寺版の一遍上人版画御影をお見立てしたく思ひます、但し目下は民藝館は夏休みで閉塞

(4) 書簡の検討と分析

大まかに書簡を分類してみると、

- ①互いの近況報告と御礼【書簡の大半】
- ②時宗(人物・仏画・仏具・仏書などの資料)に関する相互の情報提供や事実確認
【書簡3・6・7・12・13・15・18・19・22~24・28・30】
- ③時宗に関する柳の質問・依頼と中村の回答・対応
【書簡1・13・15・17・18・22・25・29~31】
- ④柳の時宗興隆への願いと動き
【書簡2・13・16・21・22】
- ⑤病身の柳への見舞い品送付と柳の感謝
【書簡22・23・28】
- ⑥年賀状・暑中見舞い【書簡8・9】

などに分けることができるが、一書簡内に上記の要素が混在しているものも多い。

②③について 中村は柳の求めに応じて、あるいは自ら時宗関連の情報、資料(『あゆみ』・愚一上人の歌、群馬県板鼻聞名寺の寺宝、一遍上人・八葉寺・円輪曼荼羅の写真等々)、仏具(持蓮華)などを送るなどして柳の研究や蒐集活動を助けている。

④について 柳は「浄土宗の宗旨を、絶対な點にまで深め浄め高められた方こそ一遍上人」(『南無阿弥陀仏』)と時宗への傾倒を述べ、実際に「貴誌のために書きたい原稿が二つある」として『あゆみ』に「一遍上人と顕意上人」を執筆した(書簡13)。寄稿の希望(8月15日)から『あゆみ』の発行(9月23日)までは40日。少ない頁数の機関誌と言えども、実現には中村の相当な尽力があったと思われる。持蓮華の蒐集についても中村は『あゆみ』で檀信徒や関係者に呼びかけるなど努力している(書簡29・30・31)。

こうした柳の熱い思いは「宗門(時宗)の為の御尽力深く感謝、小生も健康が復せば何かもっと尽したき念願」(書簡16)、「時宗の為何かもっと盡したい」(書簡21)にも見られる。柳は一遍がもっと高い評価を受けることを望んでいたが、中村はこうし

た柳の思いに献身的に答えている。

(5) 中村との交流と仏教美学

中村昌道との交流(1954?~61)は、会津が遠隔の地でもあり、途中から柳が病床横臥の状態に至ったこともあって、書簡を中心とした、いわば地味なものであった。また非常に多くの友に支えられた柳の関係者の中であって、中村は決して目立つ存在ではなく、今まであまり注目されずに来た人物である。しかし中村は最晩年の柳にとって、時宗や一遍上人に関わる理解の深化、時宗のものを含む仏画・仏具蒐集等の動きに一定の役割を果たしたと考えられる。書簡はそれを裏付ける資料である。時宗・一遍に関して言うなら、中村との邂逅によって柳は、研究・活動上の伴侶の一人を会津に得たと言っても過言ではないだろう。東明寺(弘長寺)訪問を機に交流は盛んになっていった。単純な比較はできないものの、私は、柳が1948(昭和23)年8月に富山県南砺の城端別院で、大無量寿経第四願「無有好醜の願」(形式不同・有好醜者)に出会って美と信の一如を見出し、それが『美の法門』構築への起点となった有名な出会いを想起する。

1933(昭和8)年、44歳の柳は「私の念願」(『全集』第8巻)で、「私が一生かかってやりたいと思ふ仕事、やり甲斐があると思ふ仕事、又私に適してゐると思ふ仕事は、やはり宗教真理の探究である。之が私の生涯を通じての動かない願望である。」「私は宗教の問題に関連して、もう一つしたい仕事がある。それは宗教原理をもっと突き進めて、美の問題に当てはめたいのである。」と、彼の究竟のテーマと基盤を示した。

柳が提唱した民藝の、名もなき職人の手から生み出された生活用具の中に美しさを見出すという考えの背景には、修行によって「自力」で悟りを開かなくても、自然の摂理の大きな力にたより、それに身をまかせることで救われるという「他力」の教えがある。それは特に僧侶や貴族など一部の人のものだった仏教を民衆へ届けた大乘仏教、特に浄土門(浄土宗・浄土真宗・時宗)の教えと合致するものであった。

民藝美論の基礎を仏の大悲に求める。戦後まもなく柳は倫理性や宗教性をなくして民藝運動はないことをあらためて説き始める。1947(昭和22)年8月26日の河井寛次郎宛の手紙では「僕は引きつゞき妙好人伝と一遍上人のものを耽読してゐる。いつか法然→親鸞→一遍と是等の打ちつゞく法脈のことを書きたい。」(『全集』第21巻中)と記している。

その言葉通り、戦後、柳は仏教に関わる著作を以

前にも増して残すようになる。工芸に美が生じるのは仏教的原理に基づく。民藝の「物(モノ)」が仏教的な美のもとに結合できる方便であることを示す「仏教美学」を標榜し、世に問うた時期である。いわゆる「仏教美学」の四部作『美の法門』(1949)、『無有好醜の願』(1957)、『美の浄土』(1960)、『法と美』(1961)や、柳の最高傑作とされる『南無阿弥陀仏』(1955)その他、この頃の様々な論考がそれである。

柳の「他力本願」の思想は、民藝運動の背骨として貫かれた。法然・親鸞・一遍を一体として意識しつつ、一方で「一遍上人の歴史的位置をもっとよく知って貰いたいため」に著した『南無阿弥陀仏』では「法然から親鸞に、親鸞より一遍へと浄土の法門が進展して行くその足跡を見守って来たのである。私はそれらの聖人たちの差異と見るというより、それが根から幹に、幹から枝に、かくて葉に花に身に至る一連の動きとして見て来たのである。そうして他力思想が一遍上人によって、その花と開き実を結んだ」とした(「自力と他力」)。法然(僧)、親鸞(非僧非俗)、一遍(捨聖)・「念仏の思想は、一遍上人を得てその最後の仕上げを遂げたと私には思える」(同書「序文」)。「念仏が念仏する」・浄土系理念の深層への思索、その結実として柳は名号(南無阿弥陀仏)へと収斂する一遍を最後にあげた。そして新たに論考「一遍上人」を新版『南無阿弥陀仏』(1960)に加えるに至った。

蒐集活動においても、病床のまま蒐集が再開された1958(昭和33)年以降、没する直前まで柳は浄土信仰に関する和讃、御文や庶民信仰の版画も含め多くの中世仏画を集めた。白土は「着色仏画とほぼ同時期の58年から61年までに(中略)、特に浄土信仰に関する経典や版画の蒐集に意欲的であった」と指摘している(白土:2022)。

そして柳は死去する前年の1960(昭和35)年に「唐招提寺蔵印仏・摺仏古版画特別展」を日本民藝館で開催する。しかし残念ながら柳の死によって、こうした蒐集・展示活動は中断を余儀なくされた。これも白土が指摘するように、おそらく古丹波同様、柳はこれらのコレクションを礎に、より一層踏み込んだ考察を加え、展覧会の開催や著作によって「信と美」を世に問う意図を持っていたのであろう(同上書)。

初めての書簡1は1954(昭和29)年。『南無阿弥陀仏』刊行と古丹波蒐集のピークは1955(昭和30)年。この時期に柳は中村と出会う。この邂逅以降、柳は後に『時宗辞典』で教理解説を執筆し、時宗法主候補にもなる中村昌道という人物の、時宗に関す

る深奥の学理や、中村の人的ネットワークを通して多くの示唆を受け、時宗の理解を深め、蒐集活動を進展させた。

中村は柳の様々な疑問に的確に答え、情報を提供し、蒐集等にも献身的な支援を惜しまなかった。柳の病身を案ずる中村の個人的な心情も書簡に滲んでいる。柳もまた病身を押して積極的に質問し教示を受けた。また中村主宰の会報に投稿するなど、時宗興隆のために尽力した。これは「仏教美学を建てることに私の病弱な現在の軀を役立てようと考え出した」(「仏教美学について」)柳の意志の表出であり、身動きがとれない病床からの「還相」「利他」の発露でもあっただろう。

そして柳が送った『無有好醜の願』を読んだ中村の「念仏の有難さが「物」をとうしてしみじみと味えます。」(書簡14)こそ柳が説き続けた「物(モノ)」と「信」のつながり、美の探究登拝の一頂を端的に表した言葉と言えよう。中村は柳の深き理解者であった。

中見は「柳の異質なもののへの接し方には、自分ないものを相手から貪欲に学び取り、自分の不十分さを補っていかうとするきわめて積極的な姿勢が認められる。そのような積極性のなかでこそ、学ばれる対象となった相手は充実感を得ることができ、そこに社会的地位等とはかかわりのない、真の交流がもたらされるのではないだろうか。出自や地位にかかわりなく、良いものは良いとしてそこから学ぼうとする姿勢、ここに柳が良好な人間関係を保ち続けることができたヒントも見出せるのではないか。柳のこのような姿勢を正しく理解することは、柳思想の本質を理解しようとするとき、きわめて重要である。」(中見：2013)と指摘している。柳の進取の気質とそのあり方、奥の深さ・正鵠を射た卓見である。

45歳の時、柳は「若し私が一生のうちに此の世に何か甲斐ある仕事を遺せたら、それは大方友達のお蔭である」(「浅川のこと」『全集』第6巻)と記した。多くの友との交流が様々な実を結んだ柳である。その友の一人として中村の席も用意されてよい。

1961(昭和36)年5月3日早暁、柳は72年の生涯を閉じた。東明寺(弘長寺)には、兼子夫人が5月19日に中村宛に書いた自筆の礼状が、額装されて大切に保管されている。夫宗悦と中村の、生前の交流に対するとても丁寧な礼状である。中村にとって、それは誠に感慨深く、かけがえのない「最後の書簡」だったに違いない。

5 おわりに代えて

先述したように中村にはシベリア抑留を含めた過酷な戦争体験があり、会津に来てからは戊辰戦争で戦死した敵方の西軍墓地を長年にわたって供養する活動を続けた。太平洋戦争で亡くなった方々の海外慰霊の旅にも出ている。

一方、柳も日本の朝鮮統治や沖縄の方言統一等で当時の為政者を批判し、両地域の文化や人々を支援したことはよく知られている。

柳自身も空襲で日本民藝館が火災寸前まで追い込まれ、蒐集品の疎開などで極度の心労が重なるなど苦難にあえいだ。しかし柳は日中戦争・太平洋戦争を非とする見方を一貫して変えなかった。多くの知識人の中で戦争反対を唱えた数少ない人物の一人であった。今日、再評価されるべき視点であろう。

『河北新報』の中村に関する特集記事(2006年2月27日～3月3日)に載った中村の法語や言葉の中に「無有好醜」「一味和合」「兵戈無用」などがある。「無有好醜」は柳の影響であろう。中村は「世の中はきれいなものも、そうでないものもある。ささいなちがいを見つけて、得意になったり、さげすんだりすることに、一体どれほどの意味があるのだろうか。誰もがみんなかけがえのない存在。みんな手をつないでいかなければならない。」と平易に説いている。「不二」「無対辞」・二項対立を脱する、との思いは柳と通じるものであろう。そして『大無量寿経』中の「兵戈無用」(兵戈=兵士・武器)・寿岳文章は柳の蒐集品の中に戦争に関係する刀や刀に附属している鏢などはない。コレクションの中から外している、と記している(寿岳：1980)。その訳を柳に問うた時、柳は言下に「だって君、刀だの鉄砲だのは、もともと戦争に関係のあるものだろう。人殺しを連想させるようなしろものは、たとえ民具であっても、僕はきらいだ。」と答えたという(同上書)。

書簡には平和・戦争に関する直接的な記載はない。しかし2人は交流を重ねていく中で、そうした「不二」「無対辞」「寛容」「共生」といった仏教的基盤や考え方を交感し、互いの人間性を知り、味わい、親交を深めていったものと推測している。

蛇足であるが、20代半ば、私は1983(昭和58)年に会津若松市教育委員会の埋蔵文化財担当として同市大戸町の山中に所在する大戸古窯跡群で、9世紀頃の須恵器の窯を2基、発掘調査した。窯から出土した灰被(自然釉)の長頸瓶の美しさに魅了された。窯出し後にうち捨てられる碗状の焼台(窯道具)もまた美しかった。炎の動き、降り注ぐ灰・窯の中では人間(工人)がコントロールしきれない状況も生まれる。人智を超えた力があるのか・・・と思っ

た。柳の思想に触れたのはその直後であった。

柳は1953（昭和28）年頃から古丹波を精力的に蒐集し、1956（昭和31）年には日本民藝館創立二十周年記念の「丹波古陶特別展」を開催した。蒐集は1959（昭和34）年の「古丹波特別展」頃まで続く。『全集』の書簡集を見れば、この時期に古丹波入手に関わる手紙のやり取りが急増していることに気付く。浄土信仰に関する経典や版画の蒐集に意欲的だった時期とも重なる。

古丹波は特に灰被＝自然釉の美しさに秀でた焼き物であるが、「しくじりが多い窯」（「物と法」）でもある。自然が作る、自然にまかせる・・・「他力美の意義を、最もよく教へてあるもの」（「丹波の古陶」序『全集』第12巻）、すなわち「他力」に身を委ねる美と言ってよい。柳の「他力」へのさらなる傾倒と古丹波の美の再発見は、ほぼ機を一にする。柳は「この蒐集の成長は、やがて私自身の心の成長であったと云へよう。私はそれ等の焼物に絶大な恩義を受けたのを感じる。」と結んでいる。（「丹波の古陶」『全集』第12巻）

柳が最後に「他力」の極限と言ってよい焼き物、古丹波の蒐集・展示に向かったのは、柳の思索の変遷を見れば自然な流れであったと思われる。古丹波の展示は、彼独自の「仏教美学」を、それまでの人生・思索と重ね、その集大成として、自ら建立し荘厳した日本民藝館という寺院において行った最終表現であったと言えまいか。生きていれば中村との交流は続き、柳の仏教関係の著作や蒐集・展示も継続され、昇華されていったに違いない。

ここまで柳宗悦の会津における足跡と中村昌道との交流について簡単に紹介してきた。会津の足取りについてはまだ不十分で、今後、新事実が追加されたり、修正されたりする可能性がある。また紙数の関係で書簡等から見えた宗教上の考察は、ほとんど割愛せざるをえなかった。筆者の非力・不識については御寛恕を請うばかりである。

【引用・参考文献】

*紙数の関係で主なもののみ掲載する。

『柳宗悦全集』第1～22巻 1980～92 筑摩書房
 『柳宗悦選集』第1～10巻 1954～55 春秋社
 『柳宗悦宗教選集』1～5巻 1960～67 春秋社
 中村昌道編『時衆 あゆみ（一遍の念仏）』1976 時宗あゆみ会
 中村昌道編『あゆみ』*会報『あゆみ』は散逸するなどして、ほとんど存在を確認できていない。本稿では特集号を含め、入手できた号を用いている。

中村昌道『明治戊辰戦没西軍墳墓誌』1978
 中村昌道『鳥になりたい ガダルカナル島戦没者慰霊巡拝団』1988
 中村昌道・中村明枝『迎病記：妻の迎病記 私の迎病記』1989 宗教グラフ情報社
 中村昌道『聖地に行く インド仏跡巡礼』1990 宗教グラフ情報社
 「中村昌道 戊辰の地 心の種まく①～⑤」2006 河北新報 2月27～3月3日
 『会津の寺宝』2012 福島県立博物館
 笹川寿夫『会津の寺 会津若松市・北会津村の寺々』1998 歴史春秋社
 荒川瑛楠「見て知りそ 知りてな見そ」『みちのく春秋』37号 2021 本の館 亜礼母禮
 『檜枝岐村史』1970 檜枝岐村
 瀧田項一「野仏と民芸を訪ねて」『福島のいで湯』1982 北日本印刷
 斎藤弥四郎『檜枝岐物語』2003 歴史春秋社
 菅家博昭「ヒロロ（深山寒菅）の今」『会津学』4号 2008 会津学研究会 奥会津書房
 鷺山義雄『会津の民具』1982 歴史春秋社
 鷺山義雄『去りゆく民具』1969（私家版）
 柳宗悦編「岩代の本郷」『現在の日本民窯』1942 民藝叢書第三篇 昭和書房
 河井寛次郎『陶技始末』1981 文化出版局
 濱田庄司『無盡蔵』1974 朝日新聞社
 瀧田項一『瀧田項一作陶集』1985 求龍堂
 益子陶芸美術館『瀧田項一のあゆみ』2017 益子町文化のまちづくり実行委員会
 『大和川酒造コレクション選』2011 大和川酒造
 赤坂憲雄ほか『一重孔希展 いのちの炎』2021 北方風土倶楽部
 寿岳文章『柳宗悦と共に』1980 集英社
 水尾比呂志『日本民俗学大系6 柳宗悦』1978 講談社
 水尾比呂志『評伝 柳宗悦』1992 新潮社
 鶴見俊輔『柳宗悦』1977 平凡社
 阿満利磨『柳宗悦 美の菩薩』1987 リプロポート
 本多亮「柳宗悦の仏教美学」『仏教文化学会紀要』2008 2008巻16号 仏教文化学会
 佐々木隆晃『『安心決定鈔』を読む』2016 大法輪閣岡本勝人『仏教者 柳宗悦 浄土信仰と美』2022 校成出版社
 釈徹宗『法然・親鸞・一遍』2011 新潮社
 鈴木大拙『日本的靈性』2002 岩波書店
 大橋俊雄『一遍上人語録 付播州法語集』1996 岩波文庫
 大橋俊雄『一遍』1995 吉川弘文館

- 大橋俊雄『一遍聖絵』2000 岩波文庫
大橋俊雄『一遍聖』2001 講談社
栗田勇『一遍上人 旅の思索者』1990 新潮社
松竹洸哉『柳宗悦—「無対辞」の思想』2018 弦書房
長澤昌幸『構築された仏教思想 一遍 念仏聖の姿、信仰のかたち』2021 校成出版社
前田秀樹『民俗と民藝』2013 講談社メチエ
松井健『柳宗悦と民藝の現在』2005 吉川弘文館
『民藝の100年 柳宗悦没後60年記念展』2021 東京国立近代美術館ほか
杉山亨司ほか『東北へのまなざし1930～1945』2022 日本経済新聞社
『仏教考古学講座』第5巻 1984 雄山閣
白土慎太郎『仏教絵画』2022 日本民藝館
中見真理『柳宗悦「複合の美」の思想』2013 岩波書店
中見真理『柳宗悦 時代と思想』2006 東京大学出版会
その他、『民藝』『陶説』『工藝』『大法輪』『在家仏教』は各号を参照した。

【協力機関・協力者】

柳宗直、中村正眞・中村とし子（東明寺（弘長寺））、古屋真弓（日本民藝館）、村上豊隆（日本民藝協会）、原恵理子・阿部綾子（福島県立博物館）、長澤昌幸（大正大学）、川北裕子（パナソニック汐留美術館）、遠藤由美子（奥会津書房）、平野暁史（檜枝岐村教育委員会）、渡部認（会津民俗館）、佐藤弥右衛門（大和川酒造）、森田鉄平（野口記念館）、石村宗明（城端別院善徳寺）、伊藤文夫（鉢ノ子窯）、宗像利浩（宗像窯）、佐藤幹（陶雅陶楽）、五十嵐元次、田崎宏（早春窯 工房 爽）、國井秀紀（福島県文化振興財団遺跡調査部）、新城伸子（歴史春秋社）、秋月慧（西蓮寺）、辻村孝・久美子、佐々木長生、山浦弘道、山内正行、佐々風太、鈴木紀子、城健史